

東方刀物語

クロノヒメ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「……ここは……何処だ……?」

俺の名前は白憑 天（しろつき そら）。

覚えているのは、名前と自分のことと謎の女からの言葉。

全ての——を集めるという頼み事。

この物語は、一人の少年が、数々の困難を乗り越える物語……にしたいです（作者）

注意！

- ・ 不定期更新
 - ・ 処女作
 - ・ 古代スタート
 - ・ 主はそばよりうどん派
- などが含まれます。それでもいいという方は

ゆっくりして行ってね！

目次

序章

物語の始まり

1

始まり

1

2

出会い

6

3

能力

11

4

実験

17

5

対話

21

6

神話

26

7

事件

33

8

刀

38

9

変化

52

10

新天地へ

62

第二章

神の時代、人の時代

11

道中

70

12

前触れ

75

13

諏訪大戦

82

14

その後

89

15

旅立ち

95

16

意外

101

17

太子と愉快的仲間達

110

18

青き者

117

19

不安

126

20

知らなかったもの

134

21

強者

140

22

選択

147

2 2
4 3

狐 別
の の
里 事

156 151

序章

物語の始まり

1

始まり

「うーん、むにやむにや」

朝。それは人にとってはキツイものである。

寝起きは気分が悪くなる人や、「あー、今日学校行きたくねー」という人もいるだろう。

(うーん……………)

目を閉じたまま、部屋の電気をつけようとする。

スカッ

「？」

おかしい。いつも同じ位置にある電気をつける紐に手が当たらない。それに、まだ夏なのに、少し肌寒い気がする。地面も固い。

(あれ？なんでだろう?)

わからない。まあ、とりあえず起きるか。

眠気をさますため、目を擦りつつ、あくびをしながら身体を起こしてみる。

「フア〜ア、よく寝たなあ……………あ?」

そこで唾然とする。

俺がいたのは、俺の家じゃなかった。

いや、日本じゃなかった。

多分、世界でもない気がする。なぜならそれは。

辺り一面――

見たことのない高さの木がそこらじゅうに生えていたからだ。

「……………え?」

自分の目を疑う。

そして、頬をおもいつきり引つ張る。

…なぜか今「誰だつてそーする、俺もそーする」という声が聞こえたが、幻聴だろう。

そして、頬は痛かった。

つまり、これらは現実ということになる。

「あーハイハイ、なるほどね」

納得納得。俺が寝ている間にきつと、世界が減んだりとかして、最初に還つたんだろ。

よーし、それなら二度寝でもするかー……
って、

「そんな訳ねーだろツツツ!!」

ったく。何を思ってるんだ。そんなこと、あるはずがなー
ズキンツ

「!!」

突然、俺の頭が鈍く痛みを発した。

「?……な……んだ……?」

脳裏に謎の映像が流れ出す。

椅子に座つてて、目の前に、知らない女の人が座りながらこちらを見ている。

「お願いがあつてね」

と、彼女が喋り出す。

「君、全ての——を集めてくれないかな?」

——?なんだ?そこだけ上手く聞こえない…。

「まあ、答えはYesだけだけどね」

ククツと。

最後に彼女はそう笑った。

何か——面白そうなものを観るような。

そんな感じの笑い声だった。

気づいたら、さっきの頭痛は無くなっていた。
うん。わからないことだらけだ。

わからないから、仕方なく今起きている、目の前のことに集中しよう。

ところでさ。

うん。あえて、もう一度言わせてくれ。

「ここは…何処だ…?」

こんな暗く、人気がない森の中で

俺は——白憑 天は

かすかに…そう、眩いた。

「さてと」

これからどうしよう。

何をすればいいかわからないこの状況。

下手すれば、すぐ変なめに…

ガサツ…ガサガサ

「!」

どうやら、さっそく変なめにあいそうだ。

ヤバイ。

何かがこつちに来る…!

どうする? 一番いい方法は…

① 殴りかかる。

② 死んだふり。

③ 「何か」の姿を確認し、すぐ逃げる。

うん。①はない。

②も…そんなにいいとは言えない。

もし連れ去られたりして変な実験とかだったら嫌だし…

よし③だ。

物音は近い。 もうすぐ来る——

「へ?」

俺は、間抜けな声を出した。

何故なら…

物音がした方向から…

美しい女の人が出てきたからだ。

…。

いやさ、

うん。

あの？

どちら様？

「あなた…」

女の人が警戒した声で聞いてくる。

「どうしてこんな場所にいるの？」

うん…その質問、俺も聞きたい。

しかしどうしよう。

寝て起きたらこんな場所にいました、なんて言えるか？

答えはNo。頭のおかしい奴だと思われる。

だから俺はとぼけることにした。

「いえ、少し道に迷ってしまっ

た。女の人の目から警戒の色は消えない。

まあ、あたり前か。

俺も同じ状況ならガッツリ疑うし。

「それは…本当か？」

「はい。本当です」

「…そうか」

あ、そうだ。何か喋るところ。

「すみません、自己紹介が遅れました。」

頭を下げながら言う。

「僕の名前は白憑 天。あなたのお名前は？」

女の人は、少し悩んでから、こう答えた。

「ああ、私の名前は——」

#2

出会い

「ああ、私の名前は

——やごころ えいりん
八意永琳だ」

「永琳さん…ですね」

ふーん、珍しい名字の人だな。

「あつ」

声をあげて思い出す。

「ん？どうかしたか？」

「そういえば……」

「あの、永琳さんは何しにこんなところに来たんですか？」

こんな所に、女の人一人で来るのはおかしすぎる。(ブルーメン)

「ああ、言ってなかったな」

辺りをキョロキョロしながら永琳さんは言う。

「私はこう見えて医師をやっているんだ。何か良いものがないか、たまに探索みたいなものをしているのだ」

「あ、そうだったんですか」

「それに、森は静かで心が落ち着くし、何より、

私が住んでいる村より空気がキレイだからな。」

と。

やんわりと、永琳さんは笑いながら言った。

「ん？ああ、そういえば」

永琳さんが、思いだしたかのように聞く。

「君は迷子になったと言っていたが、どこかに行く予定だったのか？」

あ

ヤバイ。

そこまで考えてなかった。

いや、だが待て。

永琳さんは、さつき「私が住んでる村」と言っていた。つまり、ここからそう遠くないところに村があるということだ。

なら——

「はい、この近くの村に行く予定だったんですが——」
ばれないように、表情を柔らかいまま、喋り続ける。

「もしかしたら、永琳さんの村かもしれないですね」

永琳さんは、少し考えてから俺にこう言ってきた。

「何しに村に行くつもりだ？」

「いや、ちよつとした観光を」

「フム…」

何かを考えている様子だ。

さざりりと嘘をついたが、

何か失敗したか…？

「村までの道のりは分かるか？」

少し真面目な顔でこちらを見ながら言う。

対して俺は——

「いえ、わかりません」

と。

正直に答えた。

「そうか…」

永琳さんが目を伏せ考えている

「なら…」

永琳さんが俺を見ながら言う。

「私が村まで、君をサポートしよう」

「えっ？」

何故だ？どうして——

「どうして——そんなことを？」

永琳さんが当たり前な顔で言ってくる。

「どうしてって…私は医師だぞ？困っている人を助けるのは当然だろ
？」

さも当然のように。

そう、俺に言葉をかけてくれた。

「あ、ありがとうございます」

「いや、いいさ。当然の事をするまでさ。」

永琳さんが、スツと手をだしてこう呟く。

「それじゃあ、行こうか。」

「はいー」

良かった。今の状況から、少しでも抜け出せることが出来て。

俺は安心して、永琳さんの後ろについて行きながら、そう考えた。

—————

「よし、着いたぞ」

「え？」

俺は驚きながら聞く。

「これが…村なんですか…？」

俺の目の前にあったのは——

とても大きな街であった。

俺の知っている村ではなかった。

こう、なんというか…

今の日本の建築を1000年分位進めた感じだ。

未来感がすごい。

「そんなに驚くものなのか？」

永琳さんが、意外そうに呟いた。

「は、はい…」

だが、そこで。

俺は違和感を覚えていた。

(そういえば…なぜ、周りはこんなに大きい木があるのに、こんな進んだ家があるのんだろう…)

そう。

今さらだが明らかにおかしい。

家が木製ならまだしも、全てが金属で出来ているのだ。

少し気になったので、思いきって聞いてみた。

「あの、永琳さん。」

「ん？」

「今って、地球が生まれてから、何年ぐらいたってるんですか？」

「これで、普通なら、???億年とかだが…」

「ああ、今は——」

しかし。

そんな俺の考えを裏切るように。

——地球ができてから2000年ぐらいだぞ」

「な……」

なん…だと…？

どうなっているんだ？

その言葉が本当なら——

「ほら、早く村に入るぞ」

「!…:は、はい」

永琳さんに促され、村に入った後も驚きは消えなかった。

「…:そうだ」

永琳さんがこちらを見ながら呟く。

「君、私の家で暮らしたらどうだ？」

「え？」

「住む所がないんだらう？」

「でっ、でも、永琳さんに迷惑をかけてしまいますし…」

「いいんだよ。困ってる人は、助けなきゃいけないからな。」

「え、永琳さん…」

「それに、新しい実験台になるし(ボソツ」

「?…:なにか言いましたか？」

「ん?…:何も言っていないぞ。」

「そうですか…:？」

何か恐ろしいことが聞こえた気がしたが…

まあ、気のせいかな。

さてと。再確認の時間だ。

もしきつきの言葉が本当なら、俺は今、大大昔にいることになるが…

なぜだ？思い当たる節がな…あ

「全ての——を集めてくれないかな？」

…もしこれが原因なら。

俺は…何かとんでもないことに巻き込まれたかもしれない。

「ここが私の家だ。好きに使うといい。」

「あつ、わかりました…って」

本日何回目かわからない驚きだ。

だってさ。目の前にある、大きなマンション一つが。

永琳さんの家だからだったからだ。

永琳さんに促され、大人しくマンションに入った。

「さて……と」

永琳さんが玄関の鍵をしめて、俺の方に体を向けて言ってくる。

「そうだな…我が家でも、軽く紹介するか?」

「お、お願いします」

「ん、任せたまえ。けど、その前に——」

ゾワッ

「もう少し、君のことについて詳しく話してもらおうかな?」

敵意。

誰がどう見ても感じてしまいそうなそれを、俺に向けてくる。

明らかに俺のことを警戒している。

「な、何をですか?」

「とぼけるな」

この時俺は、(あ、終わったな)と考えていた。

「まずおかしいと思ったのは、森の中で君は、村に行く道筋を知らない。それなのにだ。」

——なぜ、村に観光しに行くといったのだ?」

「ウグツ」

確かに。俺も永琳さんの立場なら、そう思う…

道を知らないくせに観光。たしかにおかしい。

「それを踏まえて、君に問おう」

スウ、と息を吸い——

「君は一体、何者なのだ?頭が悪い妖怪などでは無さそうだが…」

「え？」

今…なんて？

「妖怪…って？」

「ああ、近頃この付近に少したちの悪いやつがいてな。私もそいつのせいで、見張りなどという、めんどくさいことをやらなければという…：つと、いかんいかん。本題に戻ろう」

「は、はい」

「君は何者なのだ？」

頭の中がこんがらがっているが、俺は、永琳さん森の中で目覚めた所から、全てを語った。

—————

「ふーむ、なるほど」

全てを聞き終えた永琳さんは、少し悩んでいる顔で、俺の今後を決めていた。

「まあ、君が悪い奴ではないということとはわかった」

「あ、ありがとうございます」

炭酸が抜けたように、俺の体から緊張が抜けた。

「とりあえず、今日は疲れただろう。向こうの部屋にベットがあるから、グッスリ寝るんだな。」

「ありがとうございます」

フラフラと立ち、部屋へと向かう。

思ってた以上に疲れていたようだ。

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

永琳さんに一言いい、部屋の中に入る。

(まったく。今日はいろんなことがあったな)

重い体を動かし、ベットに向かう。

(さーて、寝るかな。明日も——)

ズキンッ

「ヴグ!?」

突如俺は、謎の頭痛に襲われていた。何かを思いだした時より痛い。

あまりにも痛すぎるため、俺は地面に伏せた。

(く、薬)

永琳さんは薬師と言っていた。なら、頭痛薬ぐらいならあるはず――

しかし。

そこで俺の意識は途絶えてしまった。

居心地のいい。

ハッキリと、その言葉が浮かぶ所に俺はいる。

しかし、そこがどこかはわからない。

「ピーーーー

本体トノリンク成功。サラニ深層領域ニ侵入：

オールクリア」

不意に、聞いたことのない声が聞こえた。

(なんだ? 機械…なのか?)

そんな俺の短い考察をしていた時。

俺は、体が浮かんでいく感覚を感じた。

何度も体験したことのある。

そう、これは――

――

「起きるときに感覚だ」

朝。

とてもじゃないが、目覚めがいいとは言えない。

床で寝てたからか、体があちこち痛い。

窓を覗くとまだ朝日が出てないので、そんなに寝てないことに気づく。

(うーん、どうしよう)

一応、永琳さんに会いに行くか。

「おはようございまーす」

扉を開けると、永琳さんがそこにいた。

「ん、ああ、おはよ——」

なぜか永琳さんはそこで口を閉ざした。

「?どうかしましたか?」

「…君…どうした?」

「え?」

「昨日までは無かったはずの、霊力が、ある」

「れいりよく?」

「簡単に言くと、人が持っている能力の源だが、普通の人は雫一滴ぐらいしかない」

「へー、初めて知りました」

「けれど君は——」

——プール一つ分位あるぞ?」

「え!?!」

えっ、多くね!?

「それぐらいあると、何か「能力」に目覚めるはずだが…んー、そうだ」

ポン、っと手を叩きながら、永琳さんが言う。

「少し、私が見てみよう」

「わ、わかりました」

永琳さんの方へ行き、指示に従う。

「よし、それじゃ、目を閉じろ」

「は、はい」

「深呼吸してー」

「スー、ハー」

「…ん？これは…」

「わかりましたか？」

「ああ、大体な」

「それで、俺の能力は!？」

興奮が止まらない。

「…君は興奮すると、僕から俺になるのか。つと、えーと、君の能力は

――

――「封印を操る程度の能力」…だな」

「おー!!…お？」

え？

封印？

「ふむ、なるほど。まあ、良かったんじゃないか？普通の人は、能力がないからな」

「は、はあ」

あれ？そういえば――

「永琳さんは何の能力の持ち主なんですか？」

「ああ、私は「あらゆる薬を作ることができる程度の能力」だ」

「へー、って」

え？それって、程度なの？

というか、なんで能力がわかったんだ？

薬を作る能力なら、他人の能力なんて、わからないと思うし…

「あの、なんで俺の能力が分かったんですか？」

「ん？それはだな――秘密さ」

ニパっと、いい笑顔で永琳さんが笑った。

「そ、そうですか…」

「まあ、とりあえず、朝ごはんにしようか」

「はい。分かりました。」

こうして俺の、新しい生活が始まったのである。
始まった…よな？

「さて、と」

永琳さんが朝食後のお茶を飲みながら俺に今後の予定を聞いてくる。

「どれくらいかは分からないが、君はここで暮らすだろうか？」

「できれば、ですが」

「遠慮はしないでくれ」

それに――

「何か起きた後では遅いからな」

と。

多分俺が何かをやらかす前に対応するため、自分の手元に置いていきたい…という意味だろう。

「しかしだ」

永琳さんが楽しそうな声で呟く。

「そうなってしまうては、君もつまらないだろう?」

「と、いいいますと?」

「少し位、自由でもいいと言うことさ」

「?」

「この村で暮らしていくんだ。なら、村のことぐらい知っていなきやいけないだろう?」

「??」

わからないぞ?」

「今日は特に何も無い。私も何も用事が入っていないからな」

「あの、一体なにを?」

「決まっているだろう?」

――村案内さ」

…ええ?

あの広い村を？

「はっは、心配するな」

「どうやら、俺の驚きが顔に出ていたらしい。」

「今日行くのは研究所と、ある人に合わせるだけだ。」

「ある人？」

「この村で一番エライひとだよ」

「え？そんな人に会えるんですか？」

「大丈夫…のほほほ」

…まあ、永琳さんが言うのなら大丈夫だろう。

「では、早速行こうか？大丈夫だ。研究所はここから近い」

――

そりや近いはずだ。

研究所は、ホントにすぐ近くにあった。

なぜなら――

「このマンションの裏側…だったんですか…」

そう。

マンションの裏側なのである。

後で永琳さんに聞いたところ、さつきまで居たところはここの職員
の寮だったそうだ。

しかも、永琳さんは相当偉い人らしく、あれくらいの大きさは普通
らしい。

「そうだぞ、では行こうか」

「はい。…あつ」

「？」

「あの、研究所には何をしに行くんですか？」

「ああ、言っただけだったな」

永琳さんが振り返り、後ろ歩きしながら言ってくる。

「ここには、君の能力の実験と、エライ人に合わせることだ。それ以外は特には……おっと、危ない」

永琳さんが立ち止まった。

「……だ」

分厚そうな金属の扉がある。上には「第一実験室」と書かれている。

「ここで、君の能力の実験をする」

指紋認証、顔認証、音声認証を終わらせ、俺達は中に入った。

「お、おおー」

中は思ったより広く、体育館程度の広さだった。しかし、地面、壁、天井、全てが銀色の空間だった。

「それにしても……」

永琳さんが困った表情を浮かべながら俺に喋る。

「封印を操る程度能力」、かあ。何で試して見ようかな」

「あの……」

「ん？」

「封印、つてなんですか？」

「主には力を封じたり、また抑えたりすること、のはずだ」

「力を抑える……」

「とりあえず、ここにあるボールを投げて見るから、それを止めてくれ。もちろん、能力を使つてな」

「は、はいー!」

永琳さんが大きく振りかぶり、ボールを投げてきた。

…あれ？

これ、どうすればいい――

グキツ!

メリイ!!

ゴンツ!!!

ボールを取ろうとしたら、突き指して、頭に当たって、そのまま床に頭が当たった。

三コンボだどん!

…ふざけてる場合じゃないな。

「だ、大丈夫か!？」

「大丈夫です」

すみません嘘です。めっちゃ痛いです。

「うーん、もう少し別の調べ方を探すかな…」

「いや、能力の使い方が分かる機械とかないんですか？」

「うむ。ない」

「即答ですか…」

「ああ。そもそも能力者が少なく、サンプルが少なくてだな…」

「な、なるほど…」

「まあ、分からないものはしょうがない。少し早いですが、例の人に会いに行くか」

「ずっと気になっていたんですけど、その人の名前ってなんですか？」

「ああ——」

——ツクヨミ様だ」

え？神様じゃね？

「というか永琳さん」

「なんだい？」

街中：いや、村中を歩いている途中、俺は永琳さんに色々なことを聞いていた。

ちなみに、今はその”ツクヨミ様”という人に会いに行くため、村一番の家に向かっている。

「さつき能力を確認するとき、なんでボールを投げたんですか？もう少し、別の方法が…」

「…うーん、すまない。言い訳みたいになるが、一応聞いてくれるか？」

「お願いします。」

これだ。聞きたかったのは。

だってさ、なんでボールを防ぐのが実験なのさ……（泣）

「まず、説明したが、封印というのはその能力からサポート系の能力と思われるがただか、実際は違う」

「と、いいいますと？」

「相手を弱らせたり、そのまま力を封じ込めたりできるから、充分最前線で使えるのだが…」

「なにか問題でも？」

「うむ。君も体験したと思うが、実際どうだった？」

「…能力の使い方がわからなくて、何もできませんでした」

「そう、それだ」

困ったような顔をしながら、永琳さんが言う。

「今の段階では、まず君の能力は初めてだし、封印を使える人もいないから、サンプルが何も無いと言っても過言ではない。」

「…つまりそれって…」

なにも無いと言うことは…

「うむ。まったく何もわからないのだ。だから…その…」

「なるほど…もう一度聞きますけど、なぜボールを投げたんですか？」

「あー、それはな」

と、永琳さんが思い出したかのようにいう。

「なんとなくだ」

一切悪びれず、とつても正直にいつてくれた。

「は、はは、そうですか」

苦笑いしながらいうと、永琳さんは

「うん。まあ、その…なんだ…すまないな」

「いえいえ、謝らないでください。少し痛かっただけですし」

嘘だ。

実際はメチャクチャ痛かった。

大事（でもない）ことだが、もう一度。

つかもうとして手を伸ばしたら、突指して、そのままボールが顔面にあたって、最後に頭から地面に落ちた。

できれば二度とやりたくない三コンボだった。

「そうか…おつ、見えた」

「え？」

本当にこの村に来てから、驚くことが多い。

なぜなら今度は、そのツクヨミ様の家…いや違うな。だってあれ――

――サイズがショッピングモールだもん。

――

「よし、ついたな」

「…本当に、デカイですね」

とても家とは思えないサイズだ

「ちなみに、本来これは倉庫だったんだぞ？ツクヨミ様の」

…開いた口がふさがらないというのは、こういうことなのだろうか。

「まあ、ツクヨミ様が嫌がって今のサイズになったんだがな…さあ、行こうか。ツクヨミ様が一番上の階にいるからな」

「は、はい」

(もう、何でもいいや。)

俺は考えるのを止めた。

—————

そして、面会用の広場の前にきた。

「この先にツクヨミ様がいる」

永琳さんがどんだん前に進みながら、俺に教えてくれる。

「さて、行こうか」

「はい！」

(それにしても、どんなひとだろうか？)

ギイイイ

「む、なんじや永琳か」

「お久しぶりです。ツクヨミ様」

そこにいは、幼女だった。

………うん、少し端的だったか。

目の前にいたのは背(座高)が低く、髪は紫色で少し長くて、服は白い巫女服とワンピースが混ざった、かわいらしい服だった。そして胸は小さ*i*

ギロ

…なぜだろう。睨まれた気がする。

「ところで、そこにいる男が…」

「はい、先日私が見つけた人間です」

「ふむ…ほお？」

ツクヨミ様の顔が面白そうな顔に変わった。

「くつく、能力者か。面白いものを見つけたな、永琳」
なぬ？

なぜ一瞬でわかったし。

「いえ、彼を見つけたなのは偶然です」

「ほう？よし、詳しく話せ。なに、時間はまだまだある。しかしその前に——」

俺の目を見ながら、問われた。

「お主、名は？」

「えつと、白憑 天です」

「うむ、いい名じや」

満足したように視線を永琳さんに戻す。

「さて永琳よ。喋ってくれ」

「はい。おまかせ下さい」

そして少し長い時間がたち、永琳さんが全てを語り終えた。

俺と出会ったことや能力のことなど。

「なるほどのう…」

「いかがでしょうか？」

「面白かったぞ。久しぶりに楽しめた」

そういうツクヨミ様はとても嬉しそうだ。

「ところで、天とかいったな」

「な、なんでしょうか？」

「お主は我になにか聞くことはないのか？なに、我ばかりなにかを知るのでは、お主も満足できないだろう？」

「そうですね…」

うーん。聞きたいことか。特にな…あ。

「あ、じゃあ一つだけよろしいでしょうか？」

「うむ。いいぞ」

「ツクヨミ様って、かみさま——」

「え、永琳！」

「はい。なんでしょうか？」

「の、喉が乾いたのじゃ。で、できればお茶を入れてきてはくれないかの?」

「わかりました」

「すまないの。任せたぞ」

そう言うと、永琳さんはすぐに部屋から出て行った。

…俺なんかまずいこといったのかな?

「ふう、危ない危ない」

ツクヨミ様が緊張を解きながらいつてくる。

「まったく、お主、なぜ我が神様だと知っている?」

「えっと、ここにくる前の記憶にあります…」

「…そうか。」

なんだか、微妙な空気になってしまった。

「のう、天よ。お主は神話を知っているか?」

「いえ、全然知りません」

まったく知らない。ツクヨミ様の名前を聞いたのも、モ??ストでだし…

「まあよい。これもなにかの巡り合わせか…」

一方、どこか納得したツクヨミ様が俺にこういつてきた。

「天。お主に本当の神話を話す。」

そのときのツクヨミ様は、なにか覚悟したような——どこか恐れるような顔をした。

「…なぜ神話を?」

「…それは話終えてから言う。とにかく聞け。」

「…わかりました。」

こうして俺は、神様から神話を聞かされる羽目になったのだった。

「あ、あの」

「なんじゃ?」

ツクヨミ様が神話を話す前、俺はあることを聞いた。

「永琳さんは、ツクヨミ様が神様だと言うことを知っているんですか?」

「うむ、しっておるぞ」

「それなら、永琳さんも同席でよかつたのでは?」

「あ」

…ツクヨミ様って、結構おつちよこちよいなのかな?

「か、勘違いするのではない。の、飲み物がほ、欲しくてだな…」

「そ、そうですか…」

「まあいいのじゃ。さて、では神話を語ろうかの」

そう言うと、ツクヨミ様は不思議そうな顔をした。

「…どうかしましたか?」

「…そういえば、お主はどれぐらい神話を知っているのじゃ?」

神話か…

神様の名前なら一通りわかるが、物語となると何も分からないからな…

「名前ぐらいしか知りません。」

「そうか。なら、全部話すことにするかの」

そういうと、ツクヨミ様が語りだした。

—————

「むかしむかし、とある二人の神様がいた

「その名は、イザナギとイザナミと言う名前だった

「この二人の神は、今わしらが住んでいる日本と、そこにいる神々を産み出したといわれているのじゃ

「二人は仲良く、とても幸せだった

「だが、そんな二人にある悲劇が襲いかかるのじゃ

「それはイザナミが火の神・カグツチを産んだときのことじゃ

「産まれてきたカグツチの火に焼かれてしまい、火傷をおったイザナミが死んでしまったのじゃ

「イザナギはとても悲しみ、イザナミが死んだ原因である、カグツチを殺してしまったのじゃ

「だが、カグツチを殺しても、イザナギの悲しみが癒えることはなかったのじゃ

「生きる理由がなくなったイザナギは、いつそのこと死んで、死者の国に行こうと考えた

「そして気づいた…いや、気づいてしまったのじゃ

「死者の国…またの名を『黄泉の国』に行けば、愛しのイザナミに会える

「イザナギはすぐに準備を済ませ、黄泉の汚れから身を守るためお守りをもつて黄泉の国へむかったのじゃ

「黄泉の国に行き、イザナミに会おうとしたが、イザナギはまだ生者なので、黄泉の国に入ることはできなかった

「しかし、黄泉の国の門の前に立ち、声をかけると、イザナミの声がした

「イザナギはイザナミと一緒にまた国作りを再開しようと言うが、イザナミはそれを断ってしまうのじゃ

「共食

「イザナミは黄泉の食べ物をお口にし、もう二度と現世に戻ることはできなくなっていたのじゃ

「だが、イザナギは諦めなかった

「それほど、イザナミと一緒にいたかったのだろう

「イザナミはこう提案する

『黄泉の神々に戻れないか相談する』と

「イザナギは喜び、一緒に行こうとしたが、イザナミに強く拒絶されてしまう

『まだ私のことを見て欲しくない。まだ、その、準備が出来てないから…』

『だからお願い。私がいいと言うまで、この門を開けないで』と

「イザナギはその言葉を聞き、ひたすら待った

「しかし、いつになってもイザナミが出てこない

「心配になったイザナギは、約束を破り門を開けてしまう

「中はとても暗く、何も見えなかったと言う

「頭に刺していた竹のくしを燃やし、中に進んでいった

「そして、見てしまったのじゃ

「イザナミを——否

「『ソレ』を

「『ソレ』はイザナギが大好きな人の声を発した

「そこには、目が落ち窪み、体中が腐り、ウジの沸いたイザナミがいた

「ここからが本番じゃ

「わし以外の神が知ってるのは、そこでイザナミが驚いたイザナギに気づき、約束をやぶり、自分の姿を見られ、イザナミは激怒するのじゃ

「追ってくるイザナミを退けつつ、イザナギは現世に戻り、黄泉の国と

この世をつなぐものをふさいだ、と言う話じゃ

「じゃが、これは間違っている

「本当の神話は、違うのじゃ。

「ここからは、主に直接見せようかの。

—————

目を開けると、そこには何もなかった。

ただただ、暗闇が広がっていた。

(ここは…一体?)

さつきまでツクヨミ様から話を聞いていたはず…

とても暗く、そして寒い。

「イザナミ……なのか……?」

声のする方向を見ると、そこにはイザナギがいた。

遅まきながら、ツクヨミ様が言っていた意味を理解する。

これは記憶だ。多分イザナギの。

「なんで入ってきたの……う……こんな姿……見られなくなかったのに……」

そして、今喋ったのはイザナミだろう。

「そんな……イザナミ……」

イザナギが嘆いている。

(ここでイザナギが逃げるのが、偽の神話なんだよな……)

俺は、ツクヨミ様の話を思いだしつつ、その時を待った。

しかし――

「よか……った……!」

(!?)

イザナギが泣いていた。

ゆっくり、イザナミに歩いていくと、そのまま抱き合った。

「な……んで……?」

イザナミは困惑している。

醜い自分を見て、驚かないイザナギを見て。

「当たり前……だろ?」

泣きながらイザナギは言う。

「僕は君をずっと愛するよ。たとえば、君がどんな姿になろうとしても

……絶対に」

「……っ……イザナギい……!」

「イザナミ!!」

そのまま二人は強く抱き合っていた。

だかそこで――

不思議なことがおこった。

イザナギがみるみる光の粒子になっていくのだ。

「!？」

「……え?イザ……ナギ?」

「分からない!体が……」

「嫌だ!」

イザナミは叫ぶ。

「嫌だ！嫌だ！」

俺は目を逸らそうとした。
が、体が動かない。

「イザナミ！」

イザナギが言う。

「絶対に、必ず！また会うから！会って見せる！だから——」

——それまで待つてて

素晴らしい終わる前に、イザナギが消えた。

一人残されたイザナミは、泣きながら眩く。

「私……待つ……あなたを……ずっと、ずっと、ずっと……待ちつづけ
る……」

気づけば俺も泣いていた。

「——ら。——きる——い」

今のは、一体…？

「——そら！——起きる——おい！」

頭に衝撃を感じた。

「こら天！いい加減おきるのじゃ！おい！」

そこには、俺を見下ろすツクヨミ様がいた。

「ツクヨミ様……」

「まったく。起きるのが遅いぞ！」

「ご、ごめんなさい」

「まあ、仕方ないかのう。あれほどの情報を一度に休み無しで聞いた
のじゃから」

「……あの」

「む？」

「あのあとイザナギはどうしたんですか？」

ツクヨミ様は答えた。

「ああ——」

まだ見つかっていない」

「なっ!？」

「ということとは…」

「ずっと、待っておるのじやろうな…」

「!…:やっぱり、そうですか…」

「じやが、イザナギは生きている」

「え?」

「なんでわかるんだ?」

「それわの、わしがイザナギの子だからじや。しかも、わしが生れたのは、イザナギが黄泉の汚れを川で洗ったときに産まれた、三つ最高級の神がいるのじや」

息を吸い、ツクヨミ様が言う。

「一人は天照大神《アマテラスオオカミ》。もう一人は須佐之男命《スサノオノミコト》そして——」

どや顔でツクヨミ様が言う。

「このわし、月読尊《ツクヨミノミコト》じや」

えっへん!

…と言わんばかりに何も無い胸をはっている。

「む?そろそろかの」

コンコン

「ツクヨミ様、天、お茶を持ってきました」

「一旦休憩にするかの」

「コクコク」

疲れすぎて頭が動かない。

さっきまでは平気だったのに、急に疲れてきた。

よし。

早くお茶でも飲むか。

(それにしても…)

考えてしまう。

イザナギのゆくえ、謎の言葉、この世界。

俺がいたはずの世界なのに、どこか違う世界。

分からないことばかり増えていく。

「ほら天、お前には紅茶だ。疲れただろう？砂糖を入れておくからな」

「ありがとう、永琳……」

なぜか永琳さんの顔が赤くなつたが、多分気のせいだろう。

「ツクヨミ様。天となにを話していらつしやったのですか？」

「ああ、言い忘れておったの。永琳」

俺は今、ツクヨミ様と話を聞いていた場所で、永琳さんとツクヨミ様、そして俺の三人でお茶会(?)をしていた。二人はお茶だが、俺は紅茶を飲んでいる。

たぶん、永琳さんが気を使ってくれたのだろう。程よい甘さでとても美味しい。

「あれじゃ、えーと、何年前かに話した神に関する事じゃ」

「ああ、思い出しました」

どうやら永琳さんもあの話をツクヨミ様から聞いていたらしい。

実際のところ、永琳さんとツクヨミ様の間にはなんとというか、部活の先輩と後輩みたいな間柄な気がする。

「しかし、ツクヨミ様」

「む? なんじゃ?」

永琳さんが何か疑問に思っている。それにしても、この紅茶本当にうまいな。さつきから飲む手が止まらない。

「なぜその話を天にしたのですか? 関連性がなさそうですが…」

あ、確かに。そういえば聞いてなかったな。

…というか紅茶全部飲んじゃった。

「永琳さん、紅茶おかわりお願いします」

「天…君は…」

永琳さんが声色を変えて、俺に注意してくる。

「まったく、少しは話に参加したらどうだ? そんなに紅茶が美味しいのか?」

「美味しいです。今まで飲んだもので一番美味しいです」

「そうか…お茶はツクヨミ様に出すが、紅茶は誰かに出したことがなかったからな…お世辞でも美味しいと言ってくれてありがとう」

「いえ、お世辞じゃないです。本当に美味しいですよ?」

「そ、そんなにはめるな…照れるじゃないか(ボソツ)」

「?何か言いましたか?」

「な、なんでもない!」

「:ゴツホン!」

「あ」

「お主ら、ちよつとは真面目に聞かんか」

「すいません:」

「まったく:きて、なぜ天に話したか、じゃの。話す気はなかったが、天に神の因果関係:つまり、この先いろんな神に合う未来が見えたのじゃ」

「え?」

「しかも、かなり力が強いな。わしか、もしくはそれ以上の力を持った神とな。たぶん、わしを含めた三つの神か、もしかしたら:」

そういうツクヨミ様はどこか遠くを見つめていた。

しかし、すぐに俺の顔を見て、こう告げる。

「いつか関わる時が必ずくる。今日かもしれないし、死ぬときかもしれない。そのときに備えるために、そうじゃの:」

そこで視線を永琳さんに変え、

「永琳。明日、天を連れて防衛軍に連れていけ。なんの能力かは知らんが、まあ、能力者ならすぐに隊長クラスになれるじゃろ」

「??」

防衛軍?隊長クラス?

「防衛軍というのは、この村の平和を守っているものだ」

分からなかった俺にわかりやすく永琳さんが教えてくれた。

「隊長クラスとは?」

「防衛軍には二つ種類があつてな。私のような医師や学者、ほかにも様々な職業がある。これらは生産職と言われている。もう一つは村の平和や、外にいる妖怪たちを殺す戦闘職だ」

「ふむふむ:ん?」

あれ?今さらつと殺すつて言わなかった?

「そして、隊長クラスとは、まあ、戦闘職のトップだ。今は20隊ぐらいあるな」

「なるほど、大体わかりましたが…」
そこで俺はツクヨミ様に聞いた。
「なぜそこに俺が行くんですか？」
「言ったじやろ？備えるためじや」
「備えるって、まさか神様にですか？」
「うむ。まあ、頑張るのじや」
「は、はあ…」

こうして。

俺の今後が決まった。

「おっと、もうこんな時間か。永琳、天。もう今日は帰るのじや。明日から忙しくなるぞ？」

「はい、ツクヨミ様。天、家に帰るぞ」

「わかりました。…あの、ツクヨミ様」

「む？なんじや？」

「もし良かったら、また来てもよろしいですか？」

「もちろんいいぞ。じやが、その時はお菓子かなにか持ってくるのじや。いいの？」

「はい！」

「それではツクヨミ様。失礼します」

「あ、永琳。ちよっとくるのじや」

「？」

ツクヨミ様と永琳さんが二人でなにか喋っているが、声が小さくて聞こえない。

しかし突然永琳さんが、「つ、ツクヨミ様！からかわないで下さい！！」と、頬を赤らめて言った。

「もう！帰りますー！」

「そんなに怒らんでもいいと思うがの」

そういうツクヨミ様だが、顔はすごいニヤニヤしている。

「まあ、また来るまで楽しく待つておるぞ。じやあの」

「はい。今日はありがとうございました」

俺がそういった瞬間、扉が閉まった。

「まったく、行くぞ天」

「はい、永琳さん」

「…永琳でいい。さつきもそう言っただろ」

「え？言いましたか？」

「…その敬語もやめろ」

「わ、わかりま…わかった」

—————

ツクヨミ様の屋敷を出て、今は家に帰る道中だ。

「そうだ、そういえばこの店に用事があったんだ。すまない、天。少し待っててくれないか？」

「わかった。ゆっくりどうぞ」

「じゃ、行ってくる」

そういうと、永琳さんはお店の中に入って行った。

お店の壁に背をつけ、空を見上げる。

「それにしてもなあ」

思わず声に出してしまう。

「朝起きたら昔の地球（多分）にいて、しかもゲームの中みたいに能力があるし、神様や妖怪？もいるらしいし。」

「ありえない」ことが普通。

俺にとつては非日常なのに、周りにとつては日常。

なんか、調子が狂うな。

「はあ」

「おにいちゃん、どうしたの？」

——視線を横にずらすと、小学生ぐらいの女の子がいた。

「暗いことを考えていたら、いつの間にかうつむいていたらしい。」

「だいじょうぶ？おにいちゃん、迷子になっちゃったの？」

「大丈夫だ。心配してくれてありがとうな」

「だいじょうぶなの？」

「ああ。大丈夫だぞ」

「ならいいの！えへへ！」

向日葵ひまわりのような笑みを浮かべてくれた。

見ているこっちもついつい笑ってしまう。

「またね、おにいちゃん！バイバイ！」

「おう、じゃあな」

女の子が走りさって行くのを眺める。

元氣いっぱいなその背中を見届けようとしたとき。

お店と向かい側の間の路地裏から手が伸び、女の子の腕をつかみ、そのまま引きずり込んでいった。

「え？」

数秒後、遅まきながら女の子が危険なことに巻き込まれたと悟る。

急いで路地裏を確認したが――

「なッ!!」

何もなかった。

あつたのは、とても暗い裏路地だった。

少なくとも、何かがいるとは思えない。

(女の子は!?)

迷わず足を踏み出したが――

(あれ?)

そこに地面がなかった。

そんなことを知らない俺は必然的に――

「うああああああ!!」

情けない悲鳴を上げながら、落ちていった。

「うああああああ!!」

ヤバい!!

足を踏み入れたらどこかに瞬間移動、的なもの想像していたけど、これは完全に予想外だ!

(どうする!?!絶対ケガするぞ!?)

というか、ケガですむのか?

(あ…)

地面が見えてきたが多分、いや、絶対死ぬ。ケガなんて生ぬるいレベルだぜ。ありがとう、マイライフ。楽しかったなー。

ヒュウウウウウウ——

(最後にもう一回永琳さんの紅茶が飲みたかったな…)

そんなことを考えていたら、どんどん地面が近ずいてきた。

怖くて反射的に目をつぶり、俺は人生に幕を閉じ…

——スタツ

閉じ…え?

恐る恐る目を開けてみると、そこには無傷な俺と冷たい地面があった。

ほっぺが冷たいが、どうやら俺は生きているみたいだ。

(なんでだ? まあ、生きてるからいいか…)

さて、どうしたものか。

壁? をのぼって戻るのは無理だろう。どこかの黒ずくめの剣士は助走さえあれば壁を走つてのぼることができらしいが。

「あ」

暗闇に目が慣れ、あたりを見回してみると、どこかにつながっている(はず)の通路を見つけた。

少しでも現状を変えられるものを見つけ、ホツ、としたのも束の間。

(ん? 今なにか音がした気が…)

目を閉じ、耳を澄ませるが、音が反響しているせいか詳しくは分からない。

いずれにしろ、今自分ができることは限られている。

「よし、行くか」

—————

「迷った」

歩き始めて数分後。俺は暗い洞窟(?)で迷っていた。

……うん。

いやさ? まあ、どんどん進んで行ったんだよ?

けど途中で別れ道があつて、そのあととも別れ道で、しかもこの暗さだから、最終的に自分の場所すらわからなくなつたんだ。

「ハア。困つたなあ」

己の軽率な行動を悔やんだ。

その時だった。

「?」

なにかに声をかけられたような気がした。

だが、この暗い場所には何もいない。

空耳か。

「—————い」

「!？」

間違いない。なにか聞こえた。

声が出た場所を見ると、今までとはなにか違う通路があつた。

「—————来い」

明らかに来い、と言っている。

だが、この声が女の子を連れて行った変な奴かもしれない。

どうする——

もしこの声の変な奴と仮定して、なぜ来いと言う?

こつちの場所を知っているのに、来れない理由があるから? なにか悪意が? いや、さっきの声は何も含んでなかった。

………行つてみるか。

これは賭けだ。下手すると自分の身がどうなるか分からない。
だが――

足を一步踏み出す。

もう、自分の道は決まっている。

俺のことを助けてくれた永琳のように、俺も、困っていそうな人を
助けたい。

通路に足を踏み入れた瞬間、数分前の自分が味わった感覚があっ
た。

……あれ？

俺、落ちてね？

さっきのような独特な浮遊感。体にあたる風。

(またか……)

だが、さっき落ちたときは無事だった。まあ、今度もなんとかなる

はずもなく。

グギイ!

足首ヲ挫キマシター!

なん で さ。

さっきは無事だったじゃん…。

――

落ちた、という事はすなわち、さっきの場所より下にいるというこ
とだ。

「ーちに来い」

さっきの声だ。声の場所に近づいているのだろう。

声がした方向に向かって歩き始める。

足は少し痛い、多分問題ない筈だ。

歩き初めてすぐの場所に、扉があった。

普通の。どこにでもあるような。

だが、なぜか警戒してしまう。

体は普通だが、脳がこれ以上はヤバい、と危険信号を発している。

(気のせいだ……)

不安な心を消し、ドアノブに手おかけ、ひねって引いてみる。

——カチャ

……鍵はかかってないようだ。

扉を開けると、とても大きいところに出た。

さつきより寒い。

足が一步出た。

自分は何も意識していない。

勝手に動いた。

前を見つめる。

「こつちに来い」

あの声だ。

足を進める。

ドクン、ドクン

心臓がうるさい。まるで、耳のすぐ横にあるかのように、高鳴っている。

やがて、何かが見えてきた。

そこだけなぜか明るい。まるで、月明かりの下にあるかのように立ち止まる。

そして息を飲んだ。

——そこには、とても美しい刀があった。

刀は触ったことすら、ましてや見たことがない。だが分かる。

この刀はすごい、と。

何がすごい、かは分からないが。

(それにしても……)

刀を見て思う。

全体的に灰色に近い白の色に、鮮やかな、少し薄い紫色の模様がほどこされている。

そんな刀が、なぜこんな所にある？

うん、わかんない。

(ちよつと触ってみようかな…)

恐る恐る触ってみる。

ツン

特に反応はない。

(…持ってみよう)

好奇心のまま、刀を持つてみる。

ズシッ

重い。

が、持てないほどじゃない。

(……………抜いてみようかな?)

これだけすごい装飾なんだ。きっと本体もキレイなはず――

抜こうと力をこめる。が――

ギッ

「？」

抜けない。

「ぐううう……」

力をどんどん入れていっても、一向に抜ける気がしない。

「ぐぐぐぐぐ………はあ」

無理だ、と悟つてしまう。

諦めて刀を置こうとしたときだった。

(ん?)

急に何かが変わった。

なんというか、今なら抜けそうな気がする。

確信がなかったが、それがすぐに起こった。

ス――

刀が動いた。刃が少し見える。

その刃は、まるで月のような色だった。
だが、そこで異変を感じた。
体が重い。

さつきに比べて少しだが、刃が見える範囲が広がっていくほど、
疲れてくる。

そして、刀をすべて抜いた瞬間――

バキンッ!

まるで、限界まで張っていた鎖が切れたような音がした。

そして――

「やっとか」

「!？」

さつきの声が聞こえた。間違いなく、この刀が喋った。

「…お前か？」

「ッ」

「俺様の封印を解いたのは」

「ふ、封印？」

「ああ。お前、俺のことを抜いたんだろ？」

「ああ、抜いた」

「だろ？なら感謝する。なにせ、あの状況なら何も出来なかったから
な」

「お、おう。そうか」

しばし流れる沈黙。

「……驚かないのか？」

「まあ、な。喋る刀は珍しいが、今までのことよりは薄いかな」
迷子だったり神様に会ったり。

「………そうか」

「て言うか、お前名前あんの？」

「どっちだ？」

「え？」

「刀か？それとも、俺様自身の名か？」

刀と自分を分けた。ということは、別々の存在なのだろうか？

「んー、お前のほうだ。」

「そうか。俺様の名はそうだな……零^{ぜろ}とでも呼べ」

「零、か。変な名前だな」

「あ?」

おっと、ついつい本音が。

「お前の名前はなんだよ?」

「白憑 天。天でいい」

「天、か。いい名だな。これから頼むぞ」

刀、いや、零を鞘にいれていると、急に変なことを言ってくる。

「おう。…あ?」

ん?頼むって、何をだ?

「?どうかしたか?」

「いや、頼むって?」

「あ?そりゃあお前…」

「?」

何かあるのか?と言おうとしたとき――

「うえーん!えーん!」

泣き声が、聞こえた。

少し前に聞いた、女の子の。

「!」

「なんだ?うるせえな…っておい、どこに行く気だ?」

「女の子の所に!早く行かないと!」

自分がなぜここに来ているかを忘れる所だった。

「…はあ」

零がため息をつく。

「おい、天。俺様を連れてけ」

は?

「は?」

なぜ?

「癪に障るが、手伝ってやるよ」

「お前、さつき何も出来ないって…」

「刀が勝手に動ける訳ねえだろ。出来るけど」
「いや出来るんかい」

「まあいい。ただ、お前じゃ助けられねえぞ？」
「なんでだ？」

「ま、見りゃいやでも分かる。天、行くぞ」

「分かった。でも、どこに？」

「…俺様の言う通りに進め」

「分かった」

会話を打ち切り、俺は刀を持ちながら走り出した。

――――

「次は右だ」

「ああ」

左右の別れ道を迷わず進んでいく。

「次も右だ」

「少し見にくいだが、左だ……そこだ、そこ」

「そこから上にあがれ」

そんなカーナビに従い数十秒後。

「うえーん！」

泣き声がどんどん近くなってきた。

「止まれ。ここからは音を立てるなよ？」

さっつき零といたところよりは狭いが、ひらけた場所に出た。

「コクコク」

「そうだな……あそこの隙間に行け。様子を見るぞ」

「なんでだ？」ボソツ

「見りゃわかる」

「そうか。というか、お前の声が聞こえるだろ」ボソツ

「あ？じゃあどうすればいいんだよ」

「それは…何とか出来ないのか？」ボソッ
「しようがねえな…」

ヌルッ

「うっ!？」

何かか俺の中に…!？」

「うるせえ。だが——」

『これでいいだろ?』

(コイツ!直接脳内に!)

『何言ってるんだが』

(どうか、何をした?)

『あ?ああ、少し繋いだだけだ』

繋ぐ?

『おっと、見えたぜ』

「なッ!」

『おいとい、うるせえな。バレるだろが』

(いや…でも…)

女の子は見えた。特に目立った傷はない。

が、問題が——

(なんだよ、アレ…)

そこには黒いなにかがいた。

人の形をしているが、身体中全部真っ黒だ。

『さあな?』

(さあな?…って…)

「うええええええん!!!!!!」

「ッ!」

女の子が今までで一番大きな泣き声を上げた。

(おい、零!どうすればいい!?!どうすれば助けられる!?)

完全にテンパっている。頭では分かっているが、制御できない。

『なあ、天』

急いでいる俺に対し、どこか間延びした零。

(なんだよ!?!早くしないと、女の子が)

『天。お前——』

——何がしたいんだ?』

「は?。」

頭が真っ白になる。

何がしたい?か、だって?』

(だから、女の子を——)

『ああ、言葉が足りなかったな。』

零が変わらずに言う。

『なんで助けたいって思ったんだ?』

なんで…なんでだ?』

『お前にとっては、ただの他人だろ?』

ただの他人。

『それなのに、なんでお前がわざわざ危険な目にあっても、助けた
いって思ったんだ?』

(そ、れは…)

確かに、零の言う通りだ。

俺はあの女の子について、なんも知らない。

ただ話しかけられただけ。

それ以上、それ以下でもない。

(でも、俺は——)

だが、それがどうした?

それでも俺は。

(他人だろうが、なんだろうが。)

目の前に危険な目にあいそうな人がいるなら。
手を差し伸べたいんだ。

自分が出れることをしないで、この先生きていくなんてことで。
俺は、後悔したくない！)

これが俺の本心だ。偽りなんてない。

『……それは、本当か?』

(ああ。当たり前だ)

『……クツ』

(?)

『ハハハハハハハハハハハハ!』

(あ?)

『ハハハハツ、と、わりいわりい』

何が面白いのか、零は笑う。

高らかに。滑稽に。

『いや、お前、面白いな。初めてだ。そんな答えを出したのは』

(…面白いつてなんだよ)

『今までの答えがな? 全員「自己」を守ることしか考えていなかった。

まあ、例外はいたが。そいつもぶつ飛んでたなあ。ククツ』

零は笑う。でも、どこか悲しそうな声だった。

『そうだな…俺を抜け』

(お、おう)

スウウ——

刀を抜いていく。

ゆっくり、ゆっくり。

刀を抜ききり、零に問う。

(どうすればいい?)

『あ? おまえ、そりやあ刀を抜いたならやることは決まってるだろ?』

(は?)

『斬れ。思いつきり』

(は？いや、俺——)

斬ったことも、握ったのも今日が初めてだぞ？と、言う前に——

『大丈夫だ。何も考えるな』

(はあ…分かったよ)

頼れるのは零だけ。

『…覚悟は決まったか？今からアイツを殺すんだぞ？』

覚悟、か。

そんなもの、決まってるわけない。

でも——

(大丈夫だ。さつき、零がそういっただろ？なら、俺はお前を信じる)

『そうか…クク、じゃあやいな』

黒いやつがいるところを見る。

こちら気付いている様ではないようだ。

『息を吸え。迷うな。立ちはだかるヤツ、そのすべてを——』

全力で走り出す。視線はずらさない。

——殺せるか？俺に？

無駄なことを考えるな。

女の子がこつちを向く。

俺は、静かに笑う

——大丈夫だよ。

黒いやつがこつちに気付いた。だが、もう遅い。

刀を振り上げる。

黒いやつが避けようとするが、間に合わない。

走った威力を殺さずに、そのまま振り下ろす。

『——断て』

ザシユン！

—————

肉を斬るときの、生々しい感触。
怖い。

「ハア…ハア…」

息が荒くなり、足がすくむ。

心が耐えきれず、零れ落ちる。

——怖い。

「お兄ちゃん……」

「!!」

そうだ、女の子が……!

女の子をみると、無事だった。

「もう…大丈夫だよ…」

ペタ

膝を付く。

安心、恐怖、心配。

様々な波が押し寄せてくる。

「うっ、えっぐ」

女の子は泣き止まない…

それもそうか。

目の前には、殺人者がいるんだから。

「よがっだよお、ひっぐ」

「!？」

なんと、俺を心配してくれたのだ。

「…ハハ」

まぶたが重くなる。どうやら、俺が思ってた以上に疲れてたようだ。

『疲れただろ？眠ってもいいぞ？』

(ハッ、悪い、零)

これ以上は、無理だわ

ドサッ

スウ…スウ…

そこには、一太刀の鮮やかな刀と、安心しきった顔をして寝ていた一人の少年がいたとき。

目の前に、見慣れない天井がある。

目を覚ました時に、一番最初に考えたことがそれだった。

「…起きたかしら？」

視線をずらすと、白衣を見に纏った永琳がいた。

「永琳……」

「体に異常はないわ。それに、もう動けるわね？」

「んっ…ああ、大丈夫だ」

「そう……」

永琳との長続きしない会話。

少しうつむいていて、どこか不機嫌そうだ。

……怒らせたか？

「なあ、永琳。もしかして怒ってる？」

「いえ、怒ってないわよ。ただ——」

「ただ？」

「感謝してるわ」

「感謝？なんでだ？」

「あなたが今回殺した妖怪は、一昨日言っていたたちの悪い妖怪のことなのよ。本来なら軍の人達がやることだったんだけど、あなたが解決したから、これ以上被害者が無くなったのよ」

……ここで、遅まきながらも違和感に気付いた。

「…なあ、永琳。喋り方変わってないか？」

「これが素よ」

「さいですか…」

「まあ、詳しいことを言うと、あなたを信用してなかったから、あんな口調になったのよね」

「へー。そうなのか…」

「これからはこの喋り方でいくわよ」

「分かった…：…なあ、永琳」

「何かしら？」

「その…俺がいたところに刀って置いてなかったか？
危ない危ない。零のことを忘れかける所だった。」

「刀…？なんのことかしら？」

「え？見てないか？」

「ええ。特にそういったものは見てないわよ」

永琳の顔を見ても、隠しているような顔じゃない。

「そうか。ありがとう」

「お礼を言うのはこっちよ」

「そうか……」

「そしてね、天」

「ん？なんだ？」

「あの…謝ることがあるのよ」

「謝ること……？」

そう言う永琳は、とても申し訳無さそうな顔をしていた。

「実はあなた……」

不老不死になっちゃったの」

「は？」

何言ってるんだミカア！

「いやいや……不老不死って……どうした？頭でも悪いか？」

「その…あなたに飲ませる薬を間違えちゃって……本当にごめんなき
い」

「それってそんなに謝ることなのか？」

「大問題よ。長く生きると、辛いことや悲しいことといる時間が多
くなるの。しかも、死にたくても死ねないのよ」

「確かに…でも、いいよ」

「？なんで？」

「そのぶん、色んなこと、人と出会うことができるだろ？なら、俺に
とってはいいことだ」

「天……」

「以外かも知れないが、不老不死って案外楽しそうだし、それに、後悔はしないって決めた。」

「……あつ、そうだ。忘れていたわ」

「永琳が何か思いだしたようだ。」

「ツクヨミ様から、天を連れてくるように言われていたのよ」

「ツクヨミ様が？なんでだ？」

「軍についての話らしいわ。私も一緒に行くわよ」

「じゃ、早速行くか」

「ベットから起き、背筋を伸ばす。」

「ふんっ——ハア」

「どうやら、かなりなまってるようだ。」

「よし、それじゃあ行くわよ」

「ドアを開け、俺は永琳についていった。」

—————

「ツクヨミ様。天を連れて来ました」

「うむ。入ってよいぞ」

「失礼します」

「ツクヨミ様の部屋に入り、椅子に座る。」

「まずは天。今回はよく頑張ってくれた。お主のおかげで、命が救われた。とても感謝している」

「いえ。俺は自分ができることをしたまでです。」

「謙虚じゃのう。それと、あの刀のことじゃが——」

「零は無事なんですか？」

「アイツめ……もう名乗りおったか」

「ツクヨミ様は困った顔をする。そして——」

「なんだよ、うるせえな……って、天じゃねえか。何やってんだこんなと

ところで」

「この声…零だな。本当に」

零が卓上に現れた。

永琳がメチャクチャ驚いているが、今はそれどころじゃない。

そして、ツクヨミ様が大事なことを話始めた。

「すまぬ、天。頼みごとを聞いてはくれぬか？」

「頼みごと…ですか？」

「うむ。軍に入ると、お主には戦闘職についてもらうと思っている」

「そこでだ。コイツがどうしてもお前と一緒にがいいって聞かなくてだな……」

そういうツクヨミ様は零を指しながら言う。

「まあな。コイツぐれえだ、月子並みにぶっ飛んでるのは」

「その名で呼ぶな、零」

「なんだよ？まだ気にしてんのか？おい」

だんだんヒートアップしていくのを、永琳が止めた。

「お二方、話が進みませんよ？」

「…：フン。だが、そういうことだ」

「なるほど…：だからあの時これからよろしくなっ、て言ったのか」

「クハハ、そういうことだ」

「そんな訳じゃ。任せたぞ、天」

「はい…：あ、零」

「なんだ？」

「そういえば、この刀の名前はなんて言うんだ？」

「…：そうだな…：おい、月子」

「だから、その名で呼ぶなど」

「お前が言え。いいな？」

「ハアア。まったく。そういうところは変わらないんじゃないかな、まったく」

ツクヨミ様が俺の方を向き、その名を呼ぶ。

「この刀の名は霊刀・月詠れいとう つくよみじゃ。大事に使えよ？」

「月詠…」

「神の名を冠する刀だ。安心しろ、お前なら使いこなせるさ」

「そろそろお開きにするかの」

「わかりました。よし、帰るぞ、天」

「わかりました……行くぞ、零」

「ちやんと腰に巻き付けとけよ？」

「分かったよ」

キイイイイイ——

バタン！

—————

軍に入ると、様々な奴らが俺を歓迎してくれた。

どうやら俺は有名人になったらしい。

軍では、主に体力作りと村の防衛を行っていた。暇な時間ができたら、零の修行をやっていた。

やはり殺す、ということには慣れないが、それでもやるしかないつ、てのは気が滅入ることだった。

そんなことも、仲間達と一緒にだったから乗り越えることが出来たと
思うが。

さて、そんな青春(?)を楽しんでた俺に変化が訪れる。

女の子を助けてから、百五十年がたった時だった。

—————

それは、俺が永琳と紅茶を飲んでいた時だった。

「月に移住する？そりやまたなんで？」

そう。月に移住するということが決まったのだ。

「最近、妖怪達が多くなってきてるだろ？」

「……確かに」

「それでツクヨミ様が、「穢れ」がない月に移住するという事に決めたらしい。」

「穢れ？」

「私達にとつて、穢れとは寿命を縮めるものだ。まあ、私やツクヨミ様には耐性があるが、村の人にはない」

「なるほど」

「ああ。ちなみに、月にはロケットで行く」

「すごいな……」

「ふふん、すごいだろ」

「いつ移住するんだ？」

「ああ、一週間後だ」

思ったよりも短いな……

「なあ、永琳」

「なんだ？」

「ツクヨミ様って、いつもの屋敷にいるんだよな？」

「いるが……どうした？何か用事か？」

「ちよつと、な」

「そうか……」

「大丈夫だ。すぐに戻ってくる」

そういい、俺は席を外す。

玄関から外に出て、走り出す。

俺の今後のために。

—————

コンコン

「む？天か。入れ」

「失礼します」

「うむ。珍しいの、お主から来るのは」

「少し話しがしたく、ただいま来ました」

「ふむ。して、用件はなんじや?」

前々から、いや、あの話を聞いた時から、ずっと心にあった、言うなれば俺の望みだ。

「ツクヨミ様。俺を――」

地上に置いていってください」

「ほう?なぜじや?」

「:はい。理由は、やりたいことがあるからです」

「ふむ。やりたいこととな?」

「はい。俺は、イザナミを助けない」

空気が変わった。

ツクヨミ様が睨むように俺を見る。

「死んだものには会えん」

「それでも俺は、会いに助けたいです」

「ほう?なら、お主には助けられるのか?」

「助けます。絶対に」

「なぜじや?お主には関係なからう。それに、簡単には会えぬことぐらい、解っておらう?」

「確かにそうです。でも、あの時ツクヨミ様に話してもらった時から、俺は助けたいと思いました」

「だが駄目じや」

ツクヨミ様は折れない。

駄目だとはわかってる。でも、俺はやってみたいんだ。

……やっぱり、諦めるか……

だが、そこで以外な奴が助け船を出した。

「おい、月子。俺様からもお願いするぜ」
「……零」

「別にいいだろ、それぐらい。暴れてなにもかも壊すような奴じやねえしな」

ハア——

ツクヨミ様がため息をつく。

「まったく。そこまで言うなら仕方がないが…」

「っ、本当ですか!？」

「うむ。……じゃが、わし以外にも言うべき人がおろう?」

「ウグツ」

「…ちやんと言えよ?」

「わかりました……ツクヨミ様」

「なんじゃ?」

「今までありがとうございます」

「……ふん。もうよいであろう。帰れ」

「失礼しました」

キイイイイイ——

パタン

「よかったのか?」

「……ああ。」

ツクヨミ様の部屋から出て誰もいない中、零と話す。

「そうか。なら、もう何も言わねえ」

「……なあ、零」

「なんだ?」

「俺って、正しいことをしたのかな…?」

「…」

零が沈黙する。が、すぐに言う。

「知るか。テメエが正しいって思うんなら正しいだろ」

「フフツ」

「あ？なに笑ってやがる」

「いや、零らしいと思ってな…」

「フン。早く帰るぞ」

「ああ」

素晴らしい、走る速さを上げた。

—————

「ただいまー」

「おかえりなさいーい！」

え？

「おかえり」

「おい、永琳。この子は誰だ？」

目の前には永琳と、黒く美しい髪の女の子がいた。

「お前…誰の子だ？もしかして、お前の——」

パシンッ！

「いた!?冗談に決まってるだろ!?!」

「…フン。どうだか」

「変なのー!」

「で、誰だ？」

「ツクヨミ様に言われて、この子の教育係になったのよ」

「へー。名前は？」

「^{かぐや}輝夜よ」

「へー…え？」

かぐやって、あの？超有名な？

「…永琳」

「なによ？」

「大切にしろよ」

「当たり前でしょ。なに言ってるのよ」

「そうだな…おーい、輝夜」

「なにー？」

「俺の名前は天。今日からよろしくな」

「よろしく！」

これが俺と輝夜の初めての出会いだった。

輝夜と自己紹介し、その日の晩御飯にて。

「永琳、今日のご飯はなんだ？」

「カレーよ」

「おお、よし。永琳のカレーはうまいぞ、輝く夜」

「ホントに？なら期待しちやおっかなー？」

「フッフ、腕によりをかけてつくるわよ」

「どれくらいかかる？」

「そうね…三十分ぐらいかしら？」

「そうか…なあ、輝夜」

「なーにー？」

「なんかで遊んだりしないか？」

「ん！遊ぶー！」

無邪気な輝夜を見ると、こっちまで微笑んでしまう。

「なにで遊ぶのー？」

「そうだな…輝夜は何がしたい？」

「んー…将棋！」

この年代で将棋か…まだ若いはずなのだか。

「そうか、分かった。じゃあやるか」

そーういい、押し入れから将棋を出す

「ルールは分かるか？」

「分かるよ！天は？」

「分かるぞ」

「じゃあ、負けたら罰ゲームね！」

「罰ゲームか…何にする？」

「うーん…負けた方がアイスをおごる！」

「よし、それにするか」

駒を並べて輝夜と打ち合う。

パチッ

「……」

パチッ

「……」

一言も喋らず、俺達は打ち合ってた。将棋をやっていると、様々なことを考えなきやいけないが、それがまた楽しいと俺は思う。

「……」

パチッ

「ねえ、天」

パチッ

輝夜が話しかけてきた。彼女のわりには真剣な声で。

「ん？どうした？」

パチッ

「天はさ、永琳と結婚してるの？」

パチッ

「ん？いや、してないぞ」

パチッ

「え？じゃあなんで同じ家に住んでるの？」

「うーん……そうだ、俺の昔話でもするか？」

「うん！聞きたい聞きたい！」

将棋を中断し、俺は永琳と初めて会った時のこと等を話した。

「へえー、天にそんなことがあったのね」

「まあ、そのおかげで今俺がここに居るんだし、悪いことではないかな」

「ふーん……」

「姫、天。カレーが出来たわよ」

「はーい！」

「今行く……姫？」

「あつ、それ私ね？」

「へえー、輝夜は姫って呼ばれてるのか」

「うん、そうだよ」

居間につくと、永琳が座って待っていた。

「二人共、何の話をしていたの？」

「昔話さ。俺のな」

「そう。それじゃ、ご飯をたべるわよ」

「手をあわせて」

パンッ

「「いただきます」」

――

ロケット発射前日

時が過ぎるのは早いな、と感傷に浸っていたが、やることをやらねばと思い、放送のスイッチを入れる。

ピンポンパンポン

「あー、あー、マイクテスト、マイクテスト」

今俺がいるのは軍の施設。

大事なことを伝えるため、皆を外にある演習場に呼ぶために、放送を使っている。

「今いる人は全員演習場に来てくれ。繰り返す、今いる人は全員演習場に来てくれ」

放送をきり、俺も演習場に向かう。

「おう、天。なにするつもりだ？」

俺に話しかけてきたのは、俺と同じ時に軍に入った心樹しんきっていうやつだ。

周りのやつからも慕われていて、とてもいいやつだ。

「ちよつとな。みんなに言わなきゃいけないことがある」

「お前がか？珍しいな」

「ああ。お前も早く来いよ」

「はいよー」

五分後……

「あーあー、全員、聞こえるか？」

演習場に集まった仲間達に問う。

「聞こえるぜー!」

一番後ろにいる心樹が反応する。

「よし、それじゃあ今から大事なことを言うから、よく聞いてくれ」

俺が地上に残ると聞いたみんなの反応はバラバラだった。

泣く人、怒る人、お前らしいと笑う人。

みんながみんな、俺のことを思ってくれていて、とても嬉しいが、その分俺も悲しくなった。

「それと、もうひとつ――」

同じぐらい大事なことをみんなに伝えた。

みんなに伝え終わった後、心樹が俺に近づいてきた。

「いいのか？本当に？」

「いいんだよ。あ、心樹。お前に頼みたいことがあるが、いいか？」

「いいぜ。幼馴染の最後の願いなら、聞いてやるさ」

—————

永琳 side

ロケット発射当日

「とうとうこの日が来たのね……」

昔では考えないことをやった天才、八意 永琳はそう呟いた。

永琳は今、ロケットの発射するところで、最終チェックをしている。あらかた必要なものをのせたし、いつでも発射出来る。

「そろそろ天を呼びに行かないとね」

天から「もしロケット発射の準備ができたなら、俺を呼びに来てく

れ」と言われていた。

しかし、聞き忘れたのが天の場所。

どうしようかと迷っているところに、一人の男が永琳に近づいた。

「おつす、永琳さん。なにかお困りですか？」

「心樹か。いや、天の居場所を忘れてな」

「ああ、アイツなら確か、ツクヨミ様のところに行くって言っていましたよ。たしか、もうロケットに乗ってるはずですよ」

「そうか……では、行ってくる」

「分かりました」

永琳が言ったあと、心樹はため息をつく。

「ハア……まったく。アイツ、これでいいのかよ」

ポチッ

——ロケットが発射します。繰り返します。ロケットが発射します。

—————

ロケットが発射することに驚きつつ、永琳はツクヨミ様の部屋まで走る。

発射して困ることはないが、やはり、どこか緊張するものだ。

ツクヨミ様の部屋まで来た。

「失礼します」

素晴らしい、ツクヨミ様の部屋に入る。

「む？永琳か。どうした？」

「はい。その、天は居ませんか？」

「は？」

「え？」

驚くツクヨミ様。

「待て。……永琳。天から何も言われてないのか？」

「天から、ですか？」

特に思い当たる節はない。

「いえ、特に何も……」

「……」

ツクヨミ様が黙りこんでしまった。

「天はな。儂に地上に残ると言ったぞ？」

「えっ……」

息を飲む。

「なっ、どういうことですか!？」

「あやつがやりたい事があるとな」

「ですが！」

「あやつが決めたことだ。それに口を出すのは、いささか筋違いじゃぞ？」

「っ……」

確かにそうだ。

天が決めたことに、口を出すのは。

でも……

「まあ、そう慌てるな。あやつなら、自分の力で月まで来そうじゃがの？」

「……失礼しました」

「待て。どこに行くつもりじゃ？」

「少しやることができました」

「ふむ……そうか」

バタンツ!!

自分の部屋から弓と矢を持つ。

矢に手紙をくくりつけ、ロケットの窓に立つ。

「永琳さん、あそこの山です」

「分かったわ…それにしても、なんで？」

「俺は、アイツが納得しても、俺が納得出来ないからです」

意外なことに、永琳に天の場所を教えたのは心樹だった。

偶然見かけた心樹に、天が行く場所を聞いたら教えてくれた。

「アイツ、ロケットが発射するところが見たいって。だから、あそこの山で見るって言ってました」

「そう……。……！見つけた！」

弓を引き絞り、山目掛けて射つ。

この思いが届くようにと、願いを込めて。

天 side

「おい、お前。本当に良かったのか？」

零が聞いてくる。

「いいんだよ。それに永琳に言ったら、ついてくる、って言いそうだからな」

「お前がいいならいいが。……そろそろか」

視線を空に移すと、ロケットが飛んでいくのが見えた。

…みんなと、お別れか。

「天！避ける！」

「あ!？」

零に言われ、バックジャンプする。

ズドオオン！

数秒まで俺がいたところに矢が刺さっていた。

「なんだ!?!敵襲か!?!」

「いや、違うな」

よく見ると、矢の上の方に、紙が巻きついてある。

「なんだ…？」

矢から紙を外し、中を見ると、そこには――

『天へ』

また会うときまで、絶対に死ぬな。

永琳』

と、書いてあった。

「心樹のやつ、言いやがったな」

それに、紙が所々濡れている。

……泣きながら書いたのだろうか

それに死ぬな、か。

誰だよ、俺を不老不死にしたのは。

「行くぞ、零！」

後悔はある。名残惜しすぎる。

でも、また会えると。

天はそう、確信した。

ここから始まる、一人の人間と、刀の物語。

その先に何があるうとも。

「まずは、大きな村を目指すぞ」

決して、折れない。

そんな彼の心を表すかのように、

空は遥か彼方まで澄んでいた。

第二章

神の時代、人の時代

#11

道中

「なあ、天。本当にこつちでいいのか？」

「?こつちつて、何がだ？」

「方角だ。まっすぐに歩いてるが…大丈夫なのか？」

「ああ。大丈夫だ」

「なんでだ？」

「うーん、そうだな……」

ちやうど昼間なので、空に指を指す。

「ほら、太陽が真上にあるだろ？」

「ああ、あるな」

「今は昼間で、太陽が一番高いときだ。んで、今俺らの前の方に太陽があるだろ?前の方にある時は、そっち側は南なんだよ」

「なるほどな……お前、いつから知っていた？」

「お前と出会う前からだよ」

学校の授業でやってたからな。

「……そういえば」

二人でハモる。

まあ、だいたい考えていることは同じだろう。

「じゃ、俺から言うよ。昔話だろ？」

「そうだな。じゃ、任せる」

そして俺は、森の中から起きたところから、零に初めて会った時まで話した。

また、もしかしたら自分がいた世界の過去にいるんじゃないかとも話した。

「なるほど。つまり、お前は自分が未来から来たと考えているのか？」

「……うーん、微妙にな。あくまでも可能性の話だし」

「まあ、少しは面白かった。じゃあ、次は俺様の番だな」

「おう」

「まあざっくり言うと、俺は昔、悪いことをたくさんやったんだよ。そうしていたら、月子にこの刀に封印させられちゃった」

「んで、その時の力がこの刀に集まって、月詠の力を纏っちゃったんだろうな」

「へえ。お前悪い奴だったのか」

「まあ、な」

どこか悲しそうな顔をする零。そんな昔に何かあったのだろうか？

「つーかお前、これからどうするつもりだ？」

「ああ。とりあえず、旅を続ける。目標はイザナミを助けて、イザナキに会わせる。けど、それをクリアするには難題が二つある」

指を一本たてる。

「ひとつめは地獄：黄泉に行く方法だが、これは簡単なんだ」

「お前は死ぬねえだろ？」

「誰が死ぬかよ。まあ、行き方は确实だが、まだまだ先のはなしだ。で、問題はふたつめ」

指をもう一本たてる。

「イザナギの居場所。ぶっちゃけ、これがわからないと意味がない」

「そりやあな」

「だから、今から俺達ができるのは待つこと。でも、それじゃつまないだろ？」

「まあな。暇なのは嫌いだ」

「だから、旅をすることに決めた。まだ俺達が知らない情報、出来事が沢山あるからな」

「一理あるな」

「さてと。なあ、零」

「なんだ？」

「イノシシ型の妖怪って、旨いのか？」

山の中を歩いていると、イノシシのような妖怪に蜂合わせた。

「知るか。旨いんじゃないか？」

「ブヒイイイイ!!」

こいつ、イノシシだよな？
なんか豚っぽいが。

「集中しろよ」

「当たり前だろ」

そういい、零に手置く。

確かに、たがが人間が妖怪に勝てる訳がない。

だが、それでも妖怪に勝つために、俺は零とあるものを考えていた。
剣術だ。

なんとか流血闘術とか、カッコいいしロマンがある。

そんな感じで俺が零と相談して作ったのが――

「天零流刀法・一式」
てんれいりゅうどうほう

腰を低くし、右足を前にだす。息を吐く。

「ブヒイイイイ!!」

イノ豚が突っ込んでくる。

俺の間合いに入ったところで、居合い斬りを放つ。

『喪命』
そうめい

キンッ

「ブ、ヒ?」

イノ豚には俺が手置いている状態から、すでに刀を振り切り終わったように見えただろう。

ドサッ

『喪命』

この技は俺が殺すとき、せめて痛みを感じないように作った技である。

そのため、威力よりもスピードを重視している。

「ふむ、いい出来だ。いつもより早いな」

「そうか?……つと、そうだった」

そしてもうひとつ。

使い方がわからなかった俺の能力についてだ。

封印と聞いていたが、結構便利すぎる。

例えば、水道から水が落ちるとしよう。

それに俺の能力を使うと、落ちるということを封印する。つまり、水が落ちない。

他にも様々なことに応用できる。

霊力を固め空中に足場を作ったりや、あとは相手の動きを文字通り封印：一ミリも動かさせないようにすることだってできる。

永琳からは呆れた。

例えば、今のこのイノ豚にも使える。

もう動かないイノ豚に触る。

「えーつと、これぐらいか？」

イノ豚に霊力を流し、能力を発動する。

デメリットがあることと言ったら、相手に触らなきゃいけないところだが、刀など間接的にさわっても相手に付与することが出来る。

イノ豚に、朽ちることとこの場所から動くことを封印した。

こうして、腐ることと盗まれることを封じた訳だ。

……チートかな？チートだな。

「まあ、そこら辺の木を切って、薪にするか。頼むぞ、零」

「俺様は木より肉が斬りてえな」

「我慢しろ」

零で木を切り、火起こしに十分な量の薪を用意した。

木と木を合わせ、一瞬だけ思いつきり擦る。

そうすると、火が出る。

とんだ荒業だ。

ふところからナイフを出す。

永琳曰く、科学の結晶らしい。

何でも斬れる…訳では無いと思うが、それでも結構な切れ味をもっている。

スパツ…ザシユツ…スパツ…

「……」

黙々とナイフで切り、木で串を作り、それに刺して焼いていく。

ちようどいい感じに焼け、手に取り頬張る。

モグモグ…ゴクン

…なんと言うか、豚の中に獣の肉の味が交ざったような味だ。素材の味が強い。

……これに塩胡椒があれば最高なんだろうな。クソ、調味料を持ってくればよかった。

そこで、あることに思い付く。

「……なあ、零。お前って腹はすかないのか？」

「は？刀が何かを食える訳ないだろ」

「そりゃあそうだけど…食べたいとは思わないのか？」

「別に、俺様は元々食べなくても生きていけたからな。特にそういったものはない」

「へえー。……？じゃあ、お前って妖怪なの？」

「たわけ。そんなものと比べるな」

そんな他愛ない会話をして、旅を続けた。

そんな旅をして約300年がたった。

……え？急すぎだった？

だって、何もなかったし。

妖怪にあつたらボコして、食料や修行（素振りや筋トレ）をしてた毎日だぞ？

まあ、日本の風景は好きだから飽きなかったけど。

そして、やっと俺が知る時代になったと感じた。

「おい、天。ありやあ何だ？」

「あれって？……あー！」

零が言った先に村があった。

かなりおぼろげだが、見たことがある小屋、否、米倉。

「何だ？知ってるのか？」

「ああ！なるほど、これで今俺がいる時代が分かった！」

「時代？名前でもあんのか？」

「ああ。後にこう呼ばれる——」

——弥生時代と

#12

前触れ

「ん？おい、そこのお前、止まれ！」

「はい」

今は、さつき見つけた村の正面の入り口にいる。

「お前、どこの者だ？」

「旅人です」

「年齢は？」

「いるか？…この質問。」

「24歳（450歳以上）」

「獣を狩ったりは？」

「やりますねえ！」

「うむ。いいぞ、入れ！」

いいのかよ。

後半ふざけただけなのに。

門をくぐり、村の中に入る。

「おお」

つい声に出してしまった。

広い村だが、メチャクチャ人がいる。

しかもみんな笑っていて、とても居心地はよさそう。これはもはや、村というより国だ。

もつとも。

「チツ、うるせえな」

零は気にいってないが。

（おい零。もう少し楽しくいこうぜ？）

『勝手にしろ。……にしても、なんだ？』

零が何か違和感を感じてるらしい。

（どうした？なにかあったか？）

『いや、何でもない』

（そうか。なんかあったら言ってくれよ？）

ずっとそこで突っ立ってたら、ガタイのいいおっさんが話しかけてきた。

「よう兄ちゃん！この村はどうだい？」

「みんな笑顔で、とてもいい村だと思います」

「ガツハツハ！だろ？なにせこの村を守ってくれる、守護神様がいるんだからな！みんな安心してんのさー！」

「神様、ですか」

「おうよ。あそこの丘の上に家がたってるだろ？あそこが神様の家なんだよ。もしよければ、後で行って顔を出してくんねーか？」

「分かりました。では、早速行ってみます」

「そういい、その場から立ち去る。」

「……零」

「さあな？どんな奴が神を名乗ってんだらうな？」

——どんな奴なんだろうな？

と、聞く前に答えられてしまった。

「流石に長い間一緒にいると、分かるんだよ」

「ハツハ、そうだったな」

そして、俺達知らなかった。

この先、あんなド肝を抜かれることが起きるとは…

—————

「結構近いな。もう少し時間がかかると思っていたが…」

さっきの場所からだいたい10分後。

俺達は神様の家とやらに着いた。

(まあ、ノックでもするか…)

トントン

「ごめんくださいーい、神様いますかー？」

「はーい」

トットトット

歩いてくる音がする。

カラカラカラッ

扉があき——

「はっ?」

零とハモる。

なぜならそこには——

「ん?どーしたの?お兄さん?」

幼女がいた。

……もう一度言うが、幼女がいた。

間違いだと思い、聞く。

「えっと…君が神様かな?」

「うん、そうだよ!」

マジかよ。

なんで神様は幼女が多いんだ。

ツクヨミ様も幼女だったし…。

「で、なんのようかなー?」

「いや、挨拶だ。俺は旅をしてる身でな。村の人から神様に顔を出してと言われたんだ」

「へえー!旅人なんだ!ねえ、なにか面白い話ってないかな?」

「いいぞ。その代わりこの村のことを話してくれ」

「うん、いいよ!」

そして、俺は旅先で起こったことを話した。

この女の子…あ、名前聞いてなかった。

「なあ、名前はなんて言うんだ?」

「私の名前は洩矢^{もりや} 諏訪子^{すわこ}だよ。気軽に諏訪子って呼んでほしいな」

「分かった。俺の名前は白憑 天だ。天って呼んでくれて構わない。よろしくな」

「こちらこそ、よろしくね!」

「それで、諏訪子。この村のことを教えてくれないか？」

「うん。この村は諏訪の国って言って、私が治めている国なんだよ」

「ああ、だから守護神って言われてたのか」

「うん。この国の人達がこの国を栄えさせるかわりに、私がこの国を守るっていうね」

と、俺が諏訪子と話してた時だった。

「諏訪子様！濃尾の奴らから文が！」

「っ！分かった！・・・読み上げて」

どうやら慌ただしいが、読み上げてと言っているので俺もおとなしく聞いてみる。

「はい」

男がそういい、ふところから手紙をだす。

そして読もうとして、顔を青ざめた。

「なっ……………」

「どうしたの？早く言って」

諏訪子に促され、男が喋り出す。

「はい…………紙には『明日、貴様らの国を奪いにくる。せいぜい覚悟しておくんだな』と…………」

「なッ！」

…………なるほど。

確かに、この時代では多かった出来事だ。

「…………」

諏訪子が黙り、真剣に考えている。

…………書類仕事を泣きながらやるツクヨミ様とは大違いだ。

「みんなを集めて」

「はっ！分かりました！」

男が今来た道を走って帰る。

「ごめんね、天。こんなことになっちゃって」

「謝ることじゃないさ。…………どうするつもりだ？」

「もちろん、この国を守るよ」

一種の決意を浮かべながら、諏訪子は言う。

そこで、俺も霊力を半分くらいだして言う、いや問う

「俺もやろうか？」

諏訪子が目を丸くする。

そりゃあ、ただの人間だと思ってた人がかなりの霊力を持つてたら
びっくりするよな。

「え!?天ってこんなに霊力があるの!？」

「まあな。それで、俺も手伝おうか？諏訪子だけだとキツいだろ？」

「いや、でも」

「大丈夫だ。俺、けっこう強いから」

「う〜ん……………」

諏訪子がメチャクチャ悩んでる。

「…………ごめん、天。気持ちはうれしいけど、やっぱりダメ」

「…………何でだ？」

あの時、零はこんな気持ちだったのだろうか。

感情じゃなく、論理的でもなく。

ただ、自分のしたいことを、正義を見極めるため、あの時俺に聞いたのか。

「うん…。これは、私の、この国の戦いだから。それに天を巻き込みた
くないんだよ」

真っ直ぐに。

俺の目を見ながらいう。

「そうか。…………頑張れよ」

「うん。頑張るよ」

そして少し時間がたった時

「諏訪子様ー!」

さっきの男だ。

「みんなが集まりました」

「分かった。ありがとうね」

「いえ、お気になさらず」

「それじゃあ行くよ、天」

「はいよー」

国のみんなが集まる中、諏訪子が喋り始める。

「みんな、聞いてほしいなことがあるの」

シーン……

「明日、濃尾の奴らが攻めてくるんだ」

ザワザワ…ザワザワ…

反応はさまざまだった。

驚きに声を上げる者、周りの奴と話し合うもの、俺のように黙つて
るものなど。

諏訪子は続けて言う。

「だから、私が戦うから、みんなにはこの国を守ってほしいんだ」

「待ってくれよ、守護神様」

そこで、あのガタイのいいおっさんが待ったをかける。

「それはつまり、一人で戦うってことか？」

「うん、そうだよ。みんなを危険な目に合わせたくないから」

「でも……！」

そこで、別の若い男が言おうとするが、おっさんに止められる。

「守護神様が言うんだから、守護神様の言うことを聞け。その代わり、

俺達はこの村を死んでも守るぞ」

「お頭……」

「それでいいか？ 守護神様」

「……ごめんね。この国を任せたよ」

周りを見ながら、諏訪子が言う。

「それじゃあ解散！ 各自明日の準備をしてね」

「よし、お前ら！ そうと決まれば俺達の出来ることをやるぞー！」

おっさ……お頭はそっぴい去っていった。

諏訪子も歩いて戻ってくる。

「なあ、諏訪子」

「なあに、天」

「お前にある言葉をおくりたい」

「……」

真剣に俺の方を見る彼女に、俺が知ってる名言を言う。

『王は民のためにある者。民無くして王はありえない』

「?……それって、どういう意味?」

「王つてのは、民をまとめる人のことだ。この場合、神だけど。そして、王つてのはな。民がいなきやいないんだよ」

「……?」

「分からないか。王がいるから民がいるんじゃない。民がいるから、お前王がいるんだ」

「!」

「お前は一人じゃない。みんなの思いを背負ってるんだ。だから、必ず勝ってこい」

「……天」

「帰ってこいよ」

「うん、帰ってくるよ。絶対に」

そういい、諏訪子は家のほうに帰った。

「なあ、天」

「ん?なんだ、零」

「さっきの言葉……なかなかいいな」

「だろ?俺もそう思う。……あと、零」

「わかってる。みなまで言うな」

「ハッハ、敵わねえな」

「それじゃあ、行ってくるよ」

早朝。

諏訪子を見送りにきた人達が、みんな泣いている。

「諏訪子……」

「すまねえ、俺達がなんもできねえばかりに……」

「うんうん、みんなは悪くないよ。……帰りを待っててね？大丈夫だよ。神様を信じなさい！」

諏訪子は笑う。決して楽観してる訳じゃないが、みんなを安心させようとしているのだろうが。

「じゃあ、そろそろ行くよ。……行つてきます」

「諏訪子様あー！無事に帰ってきてくださあーい！」

……さて、と。

それじゃ、俺もやりますか。

——人の歴史の中で、名に残す戦いがある。

有名なものもあれば、あまり知られてない戦いもある。

それは、そんな戦いの一つ。

後に、こう呼ばれる戦いである。

——諏訪大戦と。

—————

諏訪子 side

とうとうこの時がきた。

前々から濃尾の国が攻めてくるんじゃないかと思ってたけど、本当にこうなるとはねー。

ハハッ。……笑ってる場合じゃ無いけど。
そうこうしてる内に、ひらけた場所にでた。
多分、濃尾の奴らと戦うにあたって、広いところで攻めてくるはずだ。

広い場所が私の能力も使いやすいから、都合がいい。

おっと、お相手さんが見えてきた。

ぶつちやけ、勝率は少ししかないけど、私はあの国の人達を守れるんだったら。

どんな戦いでも、絶対に勝ってみせる。

お相手の……大将だろうか。近づいてきた。

「諏訪の守護神よ……一人か？仲間はどうした？」

「いるよ。ここにはいないだけで」

「……そうか。だが、一人だろうがこちらも容赦はしない」

「ふん、勝手にしなよ」

こうして、諏訪大戦が始まった。

先に攻めたのは濃尾の方。

たくさんの人が弓を引き、諏訪子に容赦ない攻撃を浴びせる。

が、諏訪子はこれを避け、反撃に出た。

「くらえッー」

地面から土を盛り上がり、数人が上空に舞う。

諏訪子の能力は『坤こんを創造する程度の能力』。

坤とは、大地のことであり、諏訪子はこの能力を使い、地面を操ることが出来る。

だが――

「ふん。こんなものか」

大将にはまったく効いてない。

諏訪子は知らなかったが、この時濃尾は珍しい鉄の防具を纏っていた。

さらに、この大将も能力者である。

「ッーまだまだー」

諏訪子は諦めない。

だが、一人には限界がくる。
ズサツ!

「痛!」

なんと、諏訪子の足に矢が刺さっていた。
たがが一本、されど一本。

「今だ、たたみかけろ!」

大将の合図で、百を越える矢が降り注ぐ。

(……………ここまで、かあ)

この先自分の国がどうなるかと考えると、後悔がととも残る。
諏訪子の心の中は、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

(ごめんね、みんな…………)

矢が一番高いところに来たときに――

「諦めるのか?」

「ツ!」

声が聞こえた。

「天零流刀法・十六式」

白銀が、空を舞う。

「――『旋風』」

降り注いでいた矢が折れ、地面に落ちる。

そして、そこにいたのは――

「天! どうしてここに!」

「ん? 俺はしがない旅人だぞ? だが、途中で困ってる人がいたから、
救ってみただけだ。……………なんつってな」

もう会えないと思ってた、天がいた。

「さて、諏訪子。お前はあの女を任せたぞ」

「あはは、任せなよ! こうみえても神様なんだからね!」

「よし。じゃあ俺は……………残りをやる」

「うん、分かった。……………死なないでよね?」

さつきまで自分が陥った状況を柵にあげ、天に聞く。

「はっ、当たり前だろ」

そういい、天は走っていった。

さて。

お相手さんも待つてはくれない。

「じゃ、行きますか!」

覚悟は出来た。

後はやることをやるだけだ!

—————

天 s i d e

諏訪子に加勢することは、前日から決めていた。

……零にはバレていたが、仕方ないだろう。

諏訪子がケガをして、動けないでいる。

そこに、矢が降り注ぐが、諏訪子はブーツとして動けない。

抜刀しながら前に出て、言う。

「諦めるのか?」

「ツ!」

そのまま『旋風』を使い、矢を落とす。

少し諏訪子と話すか、あの顔なら、きっと大丈夫だ。

さて。

俺もやることをやるか。

刀を下げ、全力で走る。

敵側はびっくりして隙だらけだ。

「どうした?…止まってるぞ」

「ツ!!」

とつさに弓を捨て、剣を抜くのはいいが、遅すぎる。

「そら、よー!」

腹を蹴り、距離をとらせる。

だが、流石と言ったところか。

すでに俺の周りに剣を構えたやつが三人いる。

「天零流刀法・四式」

だが、それよりも早く

『劔斬』
『劔斬』

構えてる劔ごと斬って無効かし、おもいつきり殴り気絶させる。

(……斬らねえのか?)

残念そうに零が言う。

(ああ。無理して斬らなくてもいいだろ)

(……)

あれ? 零さん? 何でそんな不機嫌なんですか?

(別に。不機嫌じゃねえ)

嘘つけこんにやろ。

そうしていると、敵側の準備が出来たようだ。

それじゃあ――

「続きをするか」

敵側はまだ戦意を喪失してない。

攻めようとした時――

ドオオオオン!!!

……どうやら、もう一つの戦いが終わったそうだ。

急いで見に行くと、地面に伏している諏訪子と、消耗しているが

立っている敵さんがいた。

……にらまれた。

「……止めをささないのか?」

女が言う。

「ささねえよ。この戦い、あんたの勝ちだ」

「……こんなのが戦いと呼べるか」

「だが、勝ちだ。早く帰んな」

「……帰るぞ! お前ら!」

そういい、濃尾の連中は帰っていった。

「諏訪子、おい、諏訪子!」

諏訪子を揺さぶり、起こさせる。

「あ…天…」

「お前の敗けだ」

「……そっか」

「そういい、彼女は笑い――」

「う、うわあー！ーん!!」

泣いた。

泣いた、泣いた。

それほどの覚悟を持ってたんだろう。

こうしてみると、子供なんだなと思ってしまう。

やがて疲れて泣き止んだ。

「帰るぞ、お前の国に」

「……うん」

――

「！みんなー！諏訪子様が帰って来たぞー！」

諏訪子のことが見えたやつが、国中に広める。

すぐに全員が集まった。

「みんな、ごめん」

諏訪子が頭を垂れる。

「私、負けちゃった。……本当にごめん」

シーーン……

「でも、諏訪子様が生きてるんだろ？なら、俺達はそれでいいさ！」

「そうだ！」

「うんうん。死ななくて、本当によかった！」

「みんな……」

「な？だから言ったら。お前は一人じゃないって」

「天…そうだね。私は…本当に…しあつ、わせつ、者だよつ」

「諏訪子は泣き虫だな」

「うるっ、さい」

「お前ら！ 諏訪子様が生きてんだ！ 宴会するぞー！」
「「「「おー！ー！」」」」
「呑気だな。まあ、仕方ないか」

#14

その後

戦いが終わったその日、諏訪の国では宴が開かれていた。

戦いに敗け、村が無くなるまえの悲しい宴：ではなく、諏訪子が生きて帰ってきたことの宴だった。

もつとも、当の本人は遠慮がちにしているが。

そして、俺はと言うと――

(一人で酒を飲む、か。粋だが寂しいんじゃないか?)

そう。

一人で酒を飲んでるのだ。

国から少し離れた、丘の上で飲んでる。

「寂しいくはないな。零がいるし」

(だが、諏訪子と言ったか? アイツや他の奴らと飲まなくていいのか?)

「いーんだよ、俺は部外者なんだし」

手に持ったお酒を飲む。

ちなみに、このお酒は国の人からもらったお酒だ。

…酒よりコ??ラヤモンスター??とかの方がおいしい気がするなあ。

そんなこんなで零と二人?で夜を明かす。

次の日の朝、国に顔を出すとぐったりとした様子の諏訪子が声をかけてきた。

「そろそろ、どこにいたの?」

「そこらへん。てか、どうした?」

「お酒飲み過ぎたりして、あんまり寝てないの?」

「…気を付けろよ」

「うん」

そういい、諏訪子と別れる。

とくにやることもないので、もつと観光することにした。

国の人に今回のことを聞いてみると、みんな悲しそうな顔をしたが、「なんとかなるだろう」と言っていた。

そんなこんなで観光をしていたときだった。

「ん……？」

入り口の方から、何か感じた。

何かと思い、急いで行ってみる。

……昨日こんな奴と……

門が見えてくる。

あ（察し）

昨日の女（大将）とその取り巻きがいた。

「……」

「お前は……昨日の……」

「ちよつと待ってろ。今呼んでくる」

そういい、背を向け走り出す。

……なんか気まずいな

タツタツタツタ……

「おーい、諏訪子ー」

「何？どうかしたのー？」

「昨日の女が来てるぞー」

「……！分かった、今行くよ」

タツタツタツタ……

「はい、お待たせ」

「それで、濃尾のやつらはなにを望んでるんだい？」

「ああ。それについて詳しく話に来た」

「分かった。それじゃあ、案内するね」

諏訪子がそういうと、あの諏訪子の家？神社にいった。

それから3時間が過ぎ、ようやく話し合いが終わったのか、諏訪子

がとぼとぼ歩いてきた。

「お疲れ様。どんな話をしてたんだ？」

「うん……」

諏訪子が話したことをまとめると、

・ 国の信仰をよこせ

・ 危害を加えるな

らしい。

…

……信仰ってなんだ？

「そのまんまの意味だよ。あの女…神奈子かなこって言うんだけどね？私の代わりになるの……」

「まじか…つまり、アイツが守護神になるのか？」

「うん…そうなんだよ……」

「うん…そうなんだよ……」

まあ、俺もその立場だったらこうなるだろうな。

ここでふと疑問が浮かんだ。

「それじゃあ諏訪子ってどうなるんだ？」

「……わかんない。とりあえず、一回代わってから様子を見よう、ってなった」

「そうか……」

俺はそれ以上にも言えなくなった。

…この国の雰囲気がるつきり変わったりするのかな？……だとしたら結構嫌なんだが。

互いに不安をもち、それぞれを後にした。

だが、そんな不安を払拭ふっしょくすることが起きる。

—————

一週間後

久しぶりに諏訪子…神奈子の神社に向かった。

あの時以降、姿を見てない……というか、森や川の近くにいたからなのだが。

どうなったかを知るため、神社に来ているというわけだ。

トントン

「はーいーいー」

？

諏訪子の声がする。

カラカラカラッ

「どなたー？って、天じゃん。どうしたの？」

「いや、どうしたの？って……こつちが聞きてえよ」

「あ、守護神のこと？それについては——」

「私から話そう」

「そういい、後ろから神奈子が出てくる。」

「あ！神奈子！私がいっのー！」

「お前は説明が長いんだよ。あと、途中で雑談に入るからダメだ」

「えー……」

「んで、なんでだ？」

「ああ、すまない、自己紹介を忘れていた。私の名は八坂 神奈子だ。以後、よろしく頼む」

「ずいぶん丁寧だな。俺の名は白憑 天。気軽に天って呼んでくれ」

「天……？どこかで聞いたことが……？」

ビツクリした。

「いや、俺ってそんな神様が知ってんの？あ、知ってたわ（ツクヨミ様）」

「まあいい。それで、なんで諏訪子が元に戻ったかと言うと——」

神奈子の話は分かりやすかった。

諏訪子から神奈子に代わったのはいいが、国の人が神奈子を信仰しないせいで意味がないと言う。

そこで、表では諏訪子を守護神にし、実際は神奈子に信仰がいくよ
うにしたらしい。

頭いいな。

「なるほど……だから今二人は一緒に暮らしているのか」

「うん、そうだよ。あつ！聞いてよ天！神奈子ってばね、お化けがこわ
——」

「諏訪子、一回逝くか？」

「は、はい……」

「ハッハッハッ、面白いな、二人とも」

「面白くない！」

「あ……」

「ふ、ははははー！」

「天——！——」

二人そろって俺に抗議してくるが、やはり中が良い姉妹に感じてきた。

「だいたい神奈子！ハモらせないでよ！」

「諏訪子こそ、私のことを言うな！」

ははは、面白いな。

「なにお——！？」

「なんだと——！？」

口喧嘩から取っ組み合いの喧嘩に発展する。

…止めるか。

「おい、二人ともやめろ」

「ぐぐぐぐぐ……！」

駄目だ、完全に聞いてない。

……仕方ないなあ（ニツコリ）

二人の肩に手をのせる。

そして靈力を流し——

「反省しな」

動きを止める。

「なっ！体が……！」

「ちよつと天！なにをしたの!？」

「いいからそこで反省してろ。まったく、中が良いのはいいが、やりすぎは駄目だぞ？」

「うっ……」

「うっ……」

諏訪子が項垂れる。

「まあ……そうだな……」

神奈子が渋々納得する。

反省してるからもういいか。

「ほらっ」

パチンツ

指を鳴らす。

すると、諏訪子と神奈子が動けるようになった。

「お、おー。……天つてすごいね……」

「俺を誰だと思ってるんだ？白憑さんだぞ」

「……………」

あ、しけた。

心に来た……

「ま、まあそんなわけで、私たちは一緒に暮らすことになったんだよ」

「長くない？前置き」

「いいんだよ！細かいことは気にしないの！」

「ハアアア。これだから諏訪子は……」

「む！なんだよ神奈子！やるのか！」

「その前に俺が殺るぞ」

「すいませんでしたあ！」

今日も諏訪の国は平和……平和です。

諏訪と濃尾の戦いが終わり、1000年くらい（詳しくは覚えていない）が立った。

その間に様々なことがあったが、割愛させてもらう。

……少しあった大事な話と言えば、俺の寿命のことについてだ。

不老不死についてはうまくごまかしておいたが、聞かれたときはしどろもどろになりながら答えた。まったく、コミュ症かっつての。

それはそうと、最近旅をしないかっつたかというのと、諏訪子と神奈子しばらくはここに居てくれ、と折り入ってお願いされたからだ。

二人が言うには「寂しくなるから」だそう。

冗談だろ、と笑い飛ばし少しの間ギスギスしたのが懐かしい。

……なんでギスギスしたかっつて？

永琳も言っていたが、不老不死になると様々なことでトラブルが起こると言う。

今回起こったのは寿命。

そりや、自分の知ってるの人が死んでいくんだから、自分達と同じようなやつがいると安心するんだらう。

神奈子は大丈夫そうだが、いかんせん諏訪子はなあ……まだ子ど

((殴

……そんな訳で旅はしてなかったというわけだ。(ヒリヒリ)

まあでも、そろそろするんだけどね、旅。理由はちゃんとあるが、後で説明する。

二人を説得するとき詳しい理由は言わなかったが、二人とも納得してくれた。

前に比べ、あまりにアツサリしていたものだから、どうした？と聞くど、「縛るのはよくない」と思ったららしい。

そんなこんなで。

そろそろ新しい出会いを求め、旅に出る。まあ、まだこの時代なら神がいるだらう。

余談だが、諏訪子と神奈子にイザナミとイザナギのことを聞いた
ら、偽の方を知っていた。

ツクヨミ様が言っていたとおり、知っているのはごく一部らしい。
……ちなみに零も知っていた。なぜだかは言ってくれなかったが。
そして、いい知らせと悪い知らせがある。
まずはいいお知らせから。

次に行く場所が決まった。

これは神奈子が言っていたのだが、この場所より南の方に大きな村
があるらしい。

それだけなら別にどうということはないが、興味を引かせるような
ことを言ったのだ。

曰く、「十人同時に話を聞くことが出来る」とか。

それを聞いたとき、あの有名な人が浮かんだ。

そう、聖徳太子だ。

だから旅に行くと言い出したんだけどな。

そして、悪いほうのお知らせだが……

なんと妖怪が増えてきた。

それだけならなんとも無いが、いつぞやにあつたイノ豚の亜種や希
少種みたいなヤツが沢山増えてきているのだ。

これはたぶん、人間が多くなって来たからだろう。

妖怪ができるロジックは詳しくは知らないが、たしか人々の恐れや
憎みなどの悪い感情、また特別な思いが多いと出来る……と誰か言っ
ていた気がする。誰かかは忘れたが。

ここまでが今までの回想なんだが……

今、ちよつとヤバイ。

何かと言うと……

「天……早くしてよー！」

「そうだぞ。なんでも言うことを聞くと言ったのはお前だろ？」

……はい。

自分勝手なことをするのは気が引けたから、諏訪子と神奈子に言うことを聞く、って言っってしまったのだ。

二人ともまともだから、何かの手伝いとかだと思っていたのだが

……

「…なあ、本当にやるのか？」

「当たり前でしょ！それとも、天は嘘つきなの？」

「ほら、早くはいれ。もう遅いんだからな」

え？何をやるか分からないって？

添い寝だよ。

……。

いや、確かに美人な二人と寝るのは男冥利に尽きるって言うんだけど……。

流石に、ね？

「ハァー……。まったく、なんでこれなんだよ……」

「いいでしょー？」「いいだろ？」

「む……」

「はいはい、喧嘩になるなよ」

俺が止めに入る。

こうでもしないと、この二人は止められないからだ。

「まあ、今日はいいいよ！神奈子もそう思うでしょ？」

「ああ」

……解せぬ

「ほら、早くしてよー！」

「……分かったよ」

澁々布団に入る。

もう知らん、早く寝てやる。

目を閉じて眠りにつこうと――

「……ねえ、天」

はい寝れない（察し）

「何だよ」

「……本当に行くの？」

「……ああ。本当にな」

「なんでだ？なぜそんなに旅をしたがる？」

「……そうだな」

アノことを話すべきか？いや、駄目だな。

「……二人と会う前からただけどき、ある人に会おうとしてるんだよな。まあ、その人に会うにはすごい大変なだけどき……」

「会いたいだけなの？」

「いや、違うな……一言でいうなら、その人を助けたいっておもってるんだ」

「ほう？なんでだ？」

神奈子に問われる。

暗闇の中で、どんな顔をしているか分からなかったが、おそらくあの時の零みたいな顔……いや、気持を持っているんだろう。

「理由なんてないさ。俺はただ、救いを求めている人に手をさしのばして救いたいたけさ」

「……天らしいや。私も、それで助けてもらったもんね」

「まったくだ。だが、それが天の良いところだな」

沈黙が流れる。

「……スウー……スウー……」

……どうやら諏訪子が寝たようだ。

神奈子は……

「まだ起きてるぞ
起きてた。」

「そうか……寝ていいか？」

「そうだな……いいぞ」

「じゃ、おやすみ」

心臓がバクバクいつてる。

女子と一緒に寝るか……なんかいやら（以下略
すると、瞼が重くなる。

俺は抵抗しないで意識を手放した。

—————

出発当日

旅に出る当日、見送りには諏訪子と神奈子が来てくれた。

他の人も呼ぼうかと諏訪子に言われたが、呼ばなくていいと言って
おいた。

「うう〜天〜」

目をウルウルさせながら、諏訪子が言う。

「泣くな。こっちまで悲しくなってくる」

「だって〜」

「天の言うとおりだぞ、諏訪子。だがら子どもと言われるんだぞ?」

「な、なにおー!?!」

「……ま、いいとするが」

「神奈子! お前!」

「ふッ、はは……変わらないな」

「そうだな……なあ、天」

悲しそうな顔をした神奈子を見たとき、俺はとっさに言ってしまった。
た。

「言うな」

「え?」

「さようならは言わない。言うのは、また会おうだ」

「……そうか」

「あと、泣かないことな?なあ、諏訪子」

「うう、グス。……じゃあね、天」

「だから、また会おうだろ？」

「うん……また会おうね？絶対だよ？」

「達者でな、天。無茶はするなよ」

「分かったよ。……また会おうな」

「そういい、歩き出す。」

「後ろは振り向かない。」

「ジーン

「！」

「目頭が熱くなる。」

「どうやら、俺は思った以上に悲しいと思ってたみたいだ。」

「ここからさき、何度も同じことが起こるのに。」

「まあ、うじうじするのは俺らしくないからな」

「来るもの拒まず、去るもの追わずだ。」

「さあ、次はどんなものが待っているのか？楽しみだ。」

諏訪の国から旅立ち、3週間が過ぎた。

遅すぎじゃないかって……？

霊力を纏い、思いつき走り走ると1日く2日でつくのだが、零から止めておけと言われた。

なんでだ？と聞いてみると、「お前の霊力を追って、強い妖怪が追ってくるぞ」とのこと。

なので今は、のんびり森の中を歩いている。

それはいいのだが……

(なあ、零)

『なんだ？何か見つけたか？』

(さつきから、なんか付いてきていないか？)

時折、視られているような感じがする。

何かしてきた、ということはないが一応、零に言っておくべきだろう。

『ん？今さらか？』

(は？今さらって？)

『ソイツ、二日前から付いてきてるぞ』

(ハアツ!?何で言わなかったんだよ!?)

『は？逆になんで気づけなかったんだよ。アレはむしろ、誘ってる程だろ』

なんだこいつ。

(んで、何かしてこようとしてる様子はあるか？)

『今のところはないな。だが、何かしてくるかもな』

(じゃ、無視の方向で)

零がため息をついた……ような気がする。

『甘いな、まったく。前にお前の記憶を覗いた時に見た、ちよこれいと？みたいな甘さだ』

(おい、待て。……今なんて言った？というか、どういうことだ？)

コイツ、今……。俺の記憶がなんとかと言わなかったか？

『詳しいことは後で話す。だが、言えるのはお前の記憶を読み取ることが出来ると言うことだ』

(え!?なにそれお前!)

『それにしても、お前があんな女のような奴が好きなのか…』

(まさか…見たのか?)

『さあ?どうかな。それにしても、あんなか弱い奴が好みだと——』

チャキン!

「この……!」

零を抜き、折ってやろうかと考えたとき——

「おい、見えたぞ」

零にいれた力を弱める。

「あ……」

永琳と出会う前に見たことがある、五つの屋根が重なっている塔を眺める。

「やっとここまで来たか……長かったな……」

「ところで聞いてなかったが、この先どうするかつもりだ?」

「とりあえず、神奈子が言ってた人に会いに行く」

「それは必要なことか?」

「いや、必要じゃないが、後々有名になる人と会ってたら、いい気にならないか?」

「……俺はならねえな」

「そうか……(´・ω・｀)」

「なんだその顔。吐き気がする」

「う、うるさい」

そんなことを話していると、村の門の前に来た。

「そのの者、止まれ!」

止まる。

「どこから来た?」

「ここより北の国、諏訪の国から来た者だ」

「そうか、長旅ご苦労。あやかしではないだろうな?」

「あやかしに見えるか?」

「見えぬ。……よし、通っていいぞ！」

「ありがとう。感謝する」

いつもと違う言葉に苦戦する俺を見て、零が嗤ってくる。

『ハッ、合わねえな』

(仕方ないだろ。…というか、もつと楽にしてもいい気が……)

『たわけ。その方が怪しまれるだろうが』

零と会話を打ち切り、村の中に入る。

諏訪の国と比べ、どこかおっとりしている村だ。

だが、所々カラフルな服を着た人がいる。

ふむ、どうやら俺の思い出は正しいらしい。

さて、会いに行きますか。

聖徳太子に。

—————

見つからねえ……

あれから村を歩き回ったが、それらしい人が見当たらない。

零に「本当にいるのか？」と言われたり、村の人から変な目で見られたり、何よりキツかったのが金髪の女の子から睨まれたことだ。何故だ……。

すっかり意気消沈して、地面に座りどうするか考えていた。

だが、そうしていると零が話しかけてきた。

『おい天。なにやら向こうが騒がしいぞ』

見てみると、確かに人だかりが出来ている。

(何だ？何かあったのか?)

立ちあがり、向こうに行ってみる。

詳しく見てみると中心に人がいて、その回りに村人がいる。

「最近、牛の調子が——」

「近頃アイツが——」

「この頃好きな人が——」

「稲の育ちが——」

…。

なんだこれ……。

村長に相談か？ なんとというか、自分勝手だなあ。

「それなら——」

そういい、真ん中にいる人が答える。

順番にスラスラと、的確なアドバイスをドンドン喋っていく。

(すごいな……この時代にもあんな人がいるのか……)

感心してる俺に、零が言ってくる。

『お前……あれが探してた奴じゃないのか？』

「あ」

そこで俺は思い出した。

そうだ、有名な話があつたじゃないか。

「十人の話を同時に聞くことが出来る」。

…今思えば、これを知ったからここに来ようとしたんだよな。

自分の記憶の悪さに落ち込んでいるときに、村人が満足したのか、人だかりが少なくな——

「あ」

真ん中にいる人物を見て、思わず声が出る。

何故ならそこに、さつき見た金髪の女の子がいたからだ。

…聖徳太子って女の子だっけ……？

聖徳太子（？）が俺に近づいてくる。

「あなた……」

太子が厳しい顔つきで、こちらを見る。

「一体、何者ですか……？」

「はっ？」

ちよつと待て。

初対面の人…俺まだ人だよな？ に何言ってるんだ？

「ただの人間だよ」

「嘘をつかないでください。その霊力、それに思い：明らかに人外です」

おい人外認定されてるぞ、解せぬ。

「もう一度聞きます。…あなたは何者ですか？」

わずかな敵意を含ませ、太子が問う。

「さつきも言っただろ？ただの人間だ」

「……しらを切りますか。ならば――」

腰に携えた剣を抜き、俺に向ける。

「あなたの剣で見極めます……！」

ギリリッ

刺すような殺気。これほどのレベルは、そんなに見たことがない。

「どうか、なんでみんな戦闘が好きなんだ？（永琳や諏訪湖や神奈子とか）」

「……いいの？村の中だぞ？」

「構いません。あなたを見極めるには、この広さで充分です」

「確かに……なら、かかってこい」

それを聞いた太子は豆鉄砲を食らった鳩のような顔をするが、歯を強く噛み俺に言う。

「……舐めているのですか」

「いや違う。こんなこと……一太刀あれば充分だ」

「……」

太子が黙り、さつきより殺気が濃くなる。

それを見た俺は、更に煽る。

「来ないのか？…ああ、怖いならいいぞ？やらなくて「！」」

「自分から出来ないのに言い出して、取り消せないから虚勢を張ってるんだろ？無茶するなよ、子供なんだから」

ブチッ

あ、やり過ぎたか……？

「……どうなっても知りませんよ」

その顔に笑みはなく、あるのは純粹な殺意のみ。

「……」

「……」

少しの沈黙。

「……行きます」

しかし、時間が経たないということはない。

「そうか、来い」

俺は更に体を脱力させる。

この技の欠点は俺がまだ未熟だからか、準備に時間がかかることだ
がさっきの話し合いでほとんど脱力しきっている。

そして、最後に一押しする。

敵前の前、俺は目を閉じた。

ギリイッ!!!

歯を擦る音が聞こえ——

ドンツツツ!

直後、地面を蹴る音が聞こえる。

——イメージは火山。

ゆっくりと、ゆっくりと。

下からじわじわと迫ってくるような力をイメージする。

…これくらいでいいか。

ゆっくり目を開ける。

すでに間合いに入っている相手は、大上段に剣を上げ、振り下ろし
始めている。

心の中で言う。

(天零流刀法・二十五式——)

火山は急に噴火する。

脱力を止め、急に体全体に力を籠める。

その瞬間、世界がゆっくりになった。

振り下ろしている剣の速さが遅くなり、太子の表情が細かく見え
る。

分からない不安から、勝利への確信へと。

零を握り、少し刃を出す。

まだ太子の刃さつき見たときより全然動いていない。

「俺の――」

――勝ちだ。

ズガンツツツツ
音が響く。 !!
トンツ

「え……？」

太子が呆然呟く。

それはそうだろう。

勝ったと思った瞬間剣が砕かれ、相手が目の前からいなくなったからな。

呆気としてる太子に事実を突きつける。

「残念だが、お前の敗けだ」
後ろから声をかける。

「なっ……！」

動こうとするも、首に当てられた刀により動けない。

「……一体、何をしたんですか……？」

太子が聞いてくる。

どうやら俺がやったことが見えなかったようだ。

「そうだな……いちから喋るか。まず、煽ったのは俺の準備を終わらせるためだ」

「準備……?」

「この技は、脱力と硬直の差が大きければ大きい程強力になる。その脱力の時間を稼ぐために……まあ、煽ったのはすまない」

流石に、自分でもあれはないと思う。

「…続けてください」

「おう……その差が大きいと、全てゆっくりに感じるんだ。自分だけが速いからな。ここまではいいな?」

「はい…」

「後はお前の剣を斬り上げ、そのまま後ろに立って刀を突きつけただけさ」

斬り上げる時の速度が速すぎて砕いてしまったが。

「……」

「この技の名前は『烈火^{れつか}』。言っても準備に時間がかかるし、加減がしにくいしで、今の俺には実戦で不向きな技だな」

「……」

太子が黙る。

……分かりにくかったか?

「なんで……」

「ん?」

「なんで私を斬らなかつたんですか。あんなことが出来るなら、直接斬った方がいいはずですよ。それに、私だってあなたを本気で斬ろうとしたのに、一体、なんで——」

「斬りたくないんだ」

「え?」

「女の子は、斬りたくないんだ」

キリット

「……例えそれで、死んだとしてもですか」

「死ぬ、か」

刀を納めながら言う。

「分かんないな。死んだことがないから」

と、俺はちよつぴり笑いながら言った。

「……何なんですか、あなたは……」
「俺？だから、さつきから言ってるだろ？」

——ただの人間、さ」

「はっ、はは」

太子が振り向いて笑う。

「私の……完敗です……」

「まあ、気を付けろよ？世の中には、もつと強いやつがいるんだからな」

そこで、ハツとした顔を浮かべる。

「本当に失礼しました……」

「いいんだよ。それにそう思ったのはこの村が大事だからだろう？だから良いことだと俺は思う……あつ、そうだ」

「……？」

「名前、まだ聞いてないだろ？教えてくれないか？」

「ハ、ハア。……面白いことを言いますね……私の名前はとよさとみみの豊聡耳みこ 神子と申します」

「俺の名前は白憑 天。しばらくここに居るつもりだから、これからよろしくな」

「はい、師匠！」

「おう……おう……おう!？」

——出会って斬られそうになり（煽ったのはおれだが）対応したら師匠と呼ばれるようになった件。

時刻は夕暮れ時。

俺は神子と剣を交えた後、神子に村の案内をされていた。

じろじろと見てきた村の人も、神子の顔見知りだと分かると気軽に話しかけてきてくれた。

さっきの相談やこのことから見ても、神子は相当村の人に信頼されているようだ。

「そうだ師匠。師匠は今日村に来たはずですよね？」

「ああ、そうだぞ」

「泊まる場所が無いと思いますので、是非、私の家に泊まりませんか？」

「…いいのか？」

「はい、師匠なら歓迎です」

「じゃあ、お言葉に甘えて……というか、神子」

「なんででしょうか？師匠」

「その師匠呼びをやめろ。なんか、むずむずする」

なぜだか神子は俺のことを師匠呼ばわりする。

なんもしてない（思いつきりボコった）んだけどな……？

神子が目を伏しながら言う。

「私は、生まれてから誰かに教えて貰ったことがないのです。大方、自分で知って、自分で解決しての繰り返しで、村の人には教える方でしたから。ですので天のような人から、自分が出来ないことを教えてほしいのです」

…なるほど、ね。

天才というのは努力したからこそなれる、と思っていたが、例外はあるものなんだな……。

いや、神子の場合には努力することが出来る天才なのだろうか。

「そうか……でも、師匠呼びはやめろ」

「……そうですか」

神子が悲しそうな顔をする。

…しようがないな。

「安心しろ。師匠呼びはやめさせるが、神子には教わりたいことを教えるぞ」

「っ！いいのですか！」

「もちろんだ。この村に泊めさせてくれるんだからな。もちろん、俺が知ってることだけだぞ？」

「分かりました！それではさっそくですが——」

俺だって一応年上なんだし、若い者を育てるなければ（使命感）
よし、どんとこい！

「——子どもはどうすれば生まれるんですか？」

ポピイイイイイイ！

—————

とつさに「コウノトリが運んできてくれるんだぞ」と言ってしまった……。

無知とは恐ろしいことだな。

「着きました、ここです」

「おー、いい家だな」

そこにあつたのは、ザ・和風の屋敷だった。

屋敷と言っても、どちらかというとお寺よりなものだが、さすが聖徳太子。ここだけオーラが違う。

「ありがとうございます。この家も喜んでいると思います」

「大げさだな……うん？」

家の前に佇んでみると、家のほうから青く細長い帽子をかぶった女の子が走ってきた。

「太子様——！お帰りなのだ——！」

「ただいま、布都。今日は大事な人が来たのよ？」

「む？誰だそれは！」

「ししよ・・・天、自己紹介をお願いします」

「分かった。俺の名前は白憑 天。よろしくな」

「素晴らしい、手を出す。」

「ふむ、太子様のお友達か？儂の名は物部^{もののべ} 布都^{ふと}じゃ！よろしくな、天よ！」

ガシツ

元気だな。神子とは反対、と言ってもいいかもしれない。

仲良く出来そうだな。

「おーい、布都ー！」

すると、屋敷の方から大きな声が聞こえてくる。

「あの声は・・・」

神子が布都を見ながら、神妙に呟く。

「あつ、そういえば忘れておったのじゃ」

「二人の知り合いか？」

「はい。私と布都の他に、もう一人一緒に住んでいる人がいるのです・・・さすがにこの広い屋敷を1人で住むのはきついもんな。

ガダツツ！

扉が開き、中から人（また女の子）が出てくる

「おい布都！太子様を迎えにくのはいいが、今やっていることを投げ出していくのはやめろと前も言っただろ！」

・・・緑だ。

髪も、目も、服も、全部うすい緑色の方が出てきた。

「ただいま、屠自古。今は怒らないでね？」

「太子様！ですが・・・？？」

そこで、緑少女が俺に気づいたようだ。

「初めまして。俺の名前は白憑 天、よろしくな。一応、神子とは師弟・・・いや、友達の関係だ」

さすがに、初対面で師弟はいやだなあ。

「それはお見苦しい所をお見せした。私の名前は蘇我^{そが} 屠自古^{とじこ}。そこ
のバカと同じ、太子様に仕えるも者だ」

「む!?誰がバカだ屠自古！」

「うるさい、お前はとつととやることをやれ！」

「く、ハハハ」

ついつい笑ってしまった。

・・・似ていたのだ。諏訪の国にいた時と。

諏訪子と神奈子、今はどうしてるのかな・・・？

「こら、二人とも止めなさい」

そういい、神子がいつの間にか手に持っていた薄い棒で叩いた。

ベシツツツ！

「いたッ！うう〜太子様ー」

薄いのに、なんであんな威力が高いんだ・・・？

「それでは天。こちらにどうぞ」

そういい、神子が歩き出す。

俺もついて行こうとしたら、布都が話しかけてきた。

「おぬし、天と言ったの！太子様とはどういう関係なのじゃ！」

・・・コイツ、天然か。

さつき言っただけなのだが・・・。

「神子との関係は友達だな」

「む？そうなのか？」

「天、早く行きますよ」

「ほら行くぞ、布都」

「うむ！分かったのじゃ！」

そう言うと、神子がいる所に走っていった。

「・・・申し訳ありません、天様・・・。布都はいい奴ですが、いささ

か天然と言うか・・・」

と、申し訳なさそうに屠自古が言ってくるが、俺個人としては結構嬉しい。

ああいう奴は最後まで主人に尽くせる奴だと、俺は思う。

「いや、いいんだよ。あ、それと様づけは止めてくれ。俺はそんなに偉くない。」

「ですが・・・」

「いいったらいいんだよ。分かったな？」

「・・・分かりました。これからよろしくお願いします、天」

「ああ、よろしくな」

「ソラー！ハヤクキテクダサイー！」

「おっと、早く行かなくちやな」

屠自古と一緒に、歩く早さを上げた。

—————

「それでな？山の中を歩いてたらイノシシがいたんだよ。んで、突進する前にブヒイイイ！って。イノシシと豚が混ざった妖怪がいたんだぜ？」

「ハハッ、なんじゃそれは！ふはは、面白いのう！」

「そんな妖怪がいるのですか・・・」

今は晩御飯中。

布都に「旅であった面白い話をしてくれ」といわれ、色んなことを話していた。

「天は色んなことを知っているのですね！」

神子が嬉しそうに呟く。

こういう神子を見ると、年相応の女の子に見える。

「まあ、だてに長生きしてないさ」

「？天は何歳なのじゃ？」

「えーっとー・・・」

今で・・・何歳だ？

「詳しくは忘れたが、400歳は言ってるぞ」

「「え？」」

しまった、普通そんな長生きしないよな。

「なんでかは言えないが、そこは旅人だからってことで」

「た、旅人は凄いですね、天・・・」

・・・よかった、神子が真面目で。

そんなことで話していると、いつの間にか日が暮れてしまった。

「そろそろ寝る時間ですね…屠自古、天に部屋を案内してください」

「分かりました、太子様。…では、案内します」

「ありがとうございます…ああ、そうだ神子」

「どうしましたか、天」

「酒つてあるか？出来れば飲みたいんだが」

「お酒ですか…はい、もちろんありますよ。屠自古、天のお部屋に
持って行ってくれますか？」

「もちろん、持っていきます」

屠自古はそう言うと、台所から酒を持ってきた。

「それでは、改めて案内します」

部屋からでて、暗い廊下を2人で歩く

「悪いな、手間かけさせて」

「いえ、これも従者の役目ですから」

そこからしばしの沈黙。

「着きました。こちらの部屋をお使い下さい」

「ありがとうございます、感謝する」

「では、私はこれで」

トン、トン、トン、トン…

…

…行っただか。

足音が無くなったのを確認し、口を開く。

「喋っていいぞ、零」

「…やつとか。それにしても、まあ…」

「?なんだよ?」

「鼻の下を伸ばしすぎだ。見てて少し引いたぞ」

な、なに!?

「そ、それって本当か?」

「ああ。もつとも、あの3人は気づいていなかったがな」

「ならよかった…」

部屋の扉を開け、縁側に腰を掛ける。

となりには零、酒を置き、準備は完璧だ。

「じゃ、飲むか・・・お、見ろよ零。今日は満月だぜ？」

「・・・そうか」

「なんだ？お前、月好きだろ」

「満月は嫌いなんだよ。思い出すからな」

「思い出すって、何をだ？」

「・・・そのうち言う。今は、楽しもうぜ」

「それもそうだな、それじゃ・・・」

『乾杯』

——月明かりの下、俺は零と夜が明けるまで酒を飲み、語り合った。

零と酒を飲み(零は飲んでいないが)、そろそろ飽きてきたので庭で修行しようと考えた。

修行とは言ったものの、物を壊したらいけないので刀を使うと言うよりは俺の能力や霊力の修行をすることに決めた・・・のはいいのだが・・・。

「それでは、お願いします!」

まさか、神子がこんな早起きとは思わなかったのだ。

外に出ようとしている所を見られ、「何をしに行くのですか?」と聞かれ、修行をすと言ったら、「私もやりたいです!」と眩しい笑顔で言われ折れてしまった。

「よし、それじゃあ霊力を全開にして出してくれ」

「はい・・・!」

神子の周りにどんどん霊力が溢れてくる。

俺よりは少ないが、そこらの妖怪よりはあるみたいだ。

だが、少し気がかりなことがある。

純粹に、何故こんなに霊力があるのだと思ってしまったのだ。

「なあ、神子。霊力はどうやって鍛えた?」

「ハア・・・霊力、は、鍛えてません・・・ハア・・・ハア・・・ですが、村の人の信仰のおかげでここまで強く・・・ハア・・・なれまして・・・」

「分かった、もう充分だ。霊力を出さなくていいぞ」

「はい・・・ハア・・・ハア・・・」

ふむ。

・・・信仰って神以外でもいいのか。

おっと、それよりも

「そうだな、今のでわかったと思うが、神子は霊力を全部出し戦うことは出来ないみたいだな・・・なら、まずそれに慣れるか」

「慣れ、ですか……」

神子が不安そうな顔をする。

確かにきつきのような霊力を全開にしても、あれじゃ戦えないだろう。

「大丈夫だ。俺の言う通りにしろ。……行くぞ?」

「はい!」

「よし、その意気だ。……まず、目を閉じろ」

「……」

「そうしたら、霊力を足元から上に段々と押し上げるようにして霊力を出すんだ」

「……こう、ですか……?」

「……うん、初めてにしては結構いいスジだな。」

「その調子だ。後は霊力をただ漏らすだけじゃなく、ゆっくりと上にあがっていくようにイメージするんだ。あたりに広げていくんじゃない、常に自分の近くにあるようにな」

「……」

「……よし、いいかな?」

「目をあけて、俺にかかってこい」

「!……分かりました、行きます……!」

ドンツツツ!

昨日は力任せに地面を蹴り、安定しない早さだったが、今の早さは霊力のおかげで、少しの力で昨日と同じ早さになっている。

嬉しいのか、走って向かう神子の顔が緩み――

パチツ!

「痛!何をするんですか天!」

デコピンを叩き込んだ。

「基礎が出来ただけなんだから、まだ緩むな。戦いならデコピンじゃ済まないぞ?」

「うう〜」

「……だが、昨日よりは強くなったな。そのイメージを忘れるいうちに、次行くぞ」

「はい。」

——この後神子が倒れるまで修行をやり、屠自古に怒られてしまった。

もう少し限度を知った方がいいかもしれない。

—————

午前は修行、午後は村や神子の手伝いをして、1ヶ月が経った。
今のところは妖怪相手に充分、といったところか。

・・・歳をとると時間が早く過ぎるのは分かっていたが、まさかここまでとは思わなかった。

まだ若いんだけどなあ・・・見た目だけ見ればだが。

そんなことより。

最近、神子の様子がおかしい。

常にボーッとしたり、早く寝ることが多くなっている。

前に「どうかしたのか？」と聞いてみたが、神子には「いえ、なんでもありません」と言われ、それ以来なにもしてない、いや、なんにも出来ない。

女の子は大変だなあと思い村の中を歩いていると視線を感じ、振り返ると全身が青で統一された女性がこちらをじっと見てきた。

何度も見られたのでこちらも見返したらそそくさと去っていった。

・・・なんだったんだろうか？

結局、なにもいい考えも浮かばないまま俺は神子の家に帰った。

敷居を跨ぐとうすると、布都扉の前に立っており、いつも通りの笑顔を浮かべ、声をかけてくる。

「おかえりじゃ、天。・・・あ、そうじゃ、太子様を見なかったかのー？」

「神子を・・・？いや、見てないぞ。まだ帰ってきてないのか？」

「うむ・・・太子様は何をしているのじやろうか・・・気になるのう・・・」

「神子は真面目だから、そのうち帰ってくるだろ」
サーーー

「ぬう、外は冷えるのう・・・」

風が吹き、布都が寒そうな仕草をする。

「先に家に入ってる。風邪ひくぞ?」

「すまぬ、天・・・では、任せたのじゃ!」

そう言い、布都は広い神子宅に入っていった。

扉の前に立ち、今後のことを考える。

正直、この村でやりたいことは終わったから、そろそろ旅立とうと思っているのだ。

でも、神子がああ調子ならな・・・。

一人で悶々としてっていると、ザツ、ザツ・・・と足音が聞こえた。

音の方を見ると神子が歩いてきた。だが――

「天ですか。何をしていますのですか?」

「神子を待ってたんだよ。布都の代わりにな」

「そうですか・・・ありがとうございます」

「それはいい。そんなことより、神子」

「なんででしょうか?」

神子がキョトンとしたが、笑顔で聞いてくる。

その笑顔を見た俺は、確信する。

「相談に乗るから、全部話せ」

「・・・前も言いましたが、私は大丈夫ですよ?」

「とぼけるな。お前が前から悩んだのは知ってる。でも、解決出来るだろうと思っていたが、その顔は・・・」

少し迷うが、言う。

「自分を殺した、偽りだろ」

「っ・・・」

軍にいた時に見た。

妖怪に襲われ、「俺を置いて先に行け!」とテンプレなフラグを建てた奴が。

その時の顔そっくりだったからだ。

・・・まあ、俺が助けに入ったんだが。

「大丈夫です。直ぐに解決出来ますから・・・」

「・・・そんな目を逸らして霊力も不安定なままで言われてはい分かりましたって奴はいないぞ」

「・・・天、私は・・・」

なおも悩んでいる神子に申し訳なつた。

そりゃあ、自分の問題なのに他人が口を出すんだがらな・・・

「まあ、結局はお前が決めることだ。そんなに嫌ならいいぞ」

だが、神子はどこか覚悟を決めた様子で俺に言う。

「・・・天。今日の夜、私の部屋に来てください」

「分かった。・・・いいんだな？それで」

「・・・分かりません。でも・・・誰かに頼ることはいいことですの」と、いつも頼られてる神子が言う。

・・・自分から言ったことだし、ちゃんとやらなきゃな。

「それじゃ、行こうか」

そういい、神子宅に入る。

・・・今夜は長くなりそうだ。

—————

その後は特におかしい所(神子の態度をのぞけばだが)は無かった。夕食もすまし、各自がそれぞれ床に入った。

今の時刻はだいたい8時・・・だと思う。

神子の相談相手になろうとしているが、実際、神子は何で悩んでいるのだろうか？

人間関係は悪くなるはずもないし、最近是不作となった訳ではない。妖怪もちらほら襲ってくるが、何か起こる前に誰かに切りふせられていたらしい。一体誰ダロナー(棒)

そんなことを考えているうちに、神子の部屋の前に来た。

コンコン

「・・・どうぞ、お入りください」

許可を得たので部屋の中に入る。

「失礼するぞ」

「こちらにお座り下さい」

神子の前には座布団があり、そこに座る。

部屋の中はロウソクで明かりが灯しており、神子の表情は充分見える。

「・・・」

座っても神子が話を切り出せないようであるので、俺から話しかけた。

「で、お前は何で悩んでるんだ？神子」

神子は体を震わせるが、すぐに落ち着き、俺の目を見て質問をしてきた。相談ではなく。

「・・・天は――」

『不老不死』について、どう思っていますか？」

「・・・不老不死、か」

フウーーー、とため息をつく。

どう答えれば良いのだろうか？

俺の中ではもう『普通』になりつつあるが、神子のような一般人にとっては、一度はなりたいたいと思うのだろうか？

「俺にとっては・・・悪いとも言えないし、いいとも言えない・・・」

「・・・それは、どうしてですか」

「うーん、不老不死ってことは死なないってことだろ？それ自体が、いい事でもあり、悪いことでもあるんだよな」

「・・・？何が悪いことなのですか？」

「そうだな、例え話をしよう。神子にとって嬉しいことはなんだ？」

「私は村の人や布都、屠自古が幸せなら、嬉しいと思っています」

「じゃあ、悪いことは？」

神子が目を閉じ、言う。

「大切な人達が周りからいなくなること、です」

「なら、もう分かるだろう？」

「分かる、とは？」

「ここからは俺の経験談だ。」

「もし不老不死になったら、周りの奴らが全員死んでいくんだぞ？自分の目の前で。そして、自分がいくら死にたいと思っても——」
死ねない。

と、声に出さず伝える。

「それに、簡単になれるもんならみんななってるからな」
そう付け加える。

神子はどこかホツとした顔で言ってくる。

「そう、ですよね・・・ありがとうございます——」

ザワツ

「ツ！神子！」

嫌な予感を感じ、咄嗟に吠える。

「え・・・・・・？」

腰にかけていた零を抜き、嫌な感じがする方向に向ける。

「天・・・一体、どうしたのですか・・・・・・？」

神子はそう言ってくるが、俺は警戒を緩めない。

そうしていて何秒がたったか。

「うくん、バレちゃったかしら？」

壁から声が聞こえた。

「っ！」

神子が悲鳴を上げそうになるも、口に手をやり塞ぐ。

右手、左手、右足、左足、胴体、そして、顔の順番で人が出てくる。
「お前は・・・」

その顔を見た時、俺は声を出していた。
なぜなら――

「あらあらくく？あなたは昼間の……」

目の前にいる女がいった通り、昼間にあつた全身青の女だった。
だが、昼間と違う点がある。

嫌な予感と言ったが、それは多分この女が持つてる気のことだ。
俺が持つてる霊力、妖怪が、持つてる妖力とはまた違う、どこかおかしい気、気配を感じたのだ。

――お前、何者だ？

だが、それを問おうとするよりも早く神子が口を出した。

「何故あなたがこんな所に……？」

「知り合いか、神子？」

その問いには、目の前の女が答えた。

「私はこの子を導こうとしてるだけよ？」

……問の答えにはなつてないが、まあいい。

そんなことより――

「導く……？？？どういうことだ」

次に目の前の女が言ったのは、俺のド肝を抜くものだった。

「私はこの子に、『不老不死』になる方法を教えようとしているだけよ」
」

「……お前、ふざけているのか？」

睨みながら言うが、女はふわふわした態度を崩さない。

「私は真面目よ？？ただ、強い人に興味があるだけで……ねえ？」
だが、これで納得がいった。

神子が何故、不老不死について興味があつたのかを。

それを踏まえて、神子に聞く。

「神子、お前は不老不死になりたいのか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

長い沈黙。

「・・・・私——」

想定外だった。

いや、俺の勘違い？というか詳しく言わなかった神子が悪いと思う。

・・・開幕から意味の分からないことを言ってしまった。

しかし、これにはちゃんとした訳があるのだ。

それは、神子が答えを出した所に遡る。

—————

「私は——

不老不死に、なります」

神子がそう宣言したとき、俺はどんな顔をしていたのだろうか。

悲しい顔か、怒りの顔か、失望の顔か。

ただ、これは後で思ったことだが、俺自身、子供だと言うことを認識した。

「そうか・・・」

その時ふと、何故か恥ずかしくなり、思わず能力を使ってしまった。

目の前の女と神子に直接触れてはないが、ある程度自分の霊力を出す。そして、二人の体に霊力を纏わせる。

声を上げるが、直ぐに顔が驚愕に染まる。

「えっ？・・・ツ!!!」

二人に『動くことを封印』し、神子の顔を見据える。

「神子」

「ツ!!」

ただ、もういいと思った。

「今日でお前の師匠をやめる。あと、泊めてもらったり世話になった」
「……………」

そう言い、関係を一方的にきる。

「もう神子には干渉しない。……………そうだな、不老不死になるんだったら——」

左手を前にだし、零をかかげる。

二人はポカンとしてるが、青い方は俺がやることに気付いたのか、目を大きく見開いた。

「覚悟、しろよ?」

スパン——ドタツ

「ツツツ!!」

「痛……久しぶりだな、このレベルの傷は……………」

地面に転がった左手を見て、毒づく。

神子の顔は様々だった。

何をしてるんだと赤くなり、大丈夫かと青くなり、生々しい血や肉をみて白くなったりと……………」

「まあ……………これくらいなら」

手がない左腕を上げ、

「すぐ治るけど、な」

振り下ろす。

すると、振り下ろした後には元通りの左手があった。

「さて、相談は終わったし出ていきますか。じゃあな」

扉をあけ、部屋を出る。

そのまま歩くスピードを段々上げ、神子の家から出る。

夜の寒い空気を浴びながら、深い森の中に入っていった。

その後、一週間がたった。

その間特に何もせず、何も考えず過ごし、ただボツ——としてた。

自分では普通のつもりだったが、余程心にきていたのか、零に「そんなシケた面すんな。こつちまで嫌気が差してくる」と文句を言われるレベルだった。

このままじやいけないと頭では分かっているのだが、やはりなんとも言えない感情が邪魔をし、何も出来ないままだった。

だが、それも瓦解する。

ある日の朝、森の中を歩いていると、村の猟師に出会った。

「おーい、お前さんよー。お前さん、太子様の家に住んでたひとだろー？」

「どうも、ご無沙汰してます」

「お前さん、1人ですか？」

「そうですが・・・」

そう言うと、猟師はどこか納得したような感じて頷いた。

「だよなー。太子様が、あんなになつてつから、お前さんも嫌で1人なんだろー？」

「あんなとは何ですか？」

「むう？お前さん、知らねえのか？」

「はい。最近村に帰ってなくて・・・」

「なら仕方ねえか・・・太子様、病気で倒れちまつて、今日が峠で、お前さん!?!どこ行くきだい!?!」

気付いたら俺は走り出していた。

—————

すぐ村に戻り、神子の家に向かった。

が、村の人達がたむろっているの目視し、裏手から回る。

そのまま跳んで柵を越え、どうするか考えた時。

ガタガタガタ・・・

目の前で木製の扉が開いた。

これは明らかに誘っているが、今そんなことで足踏みをしてる場合じゃない。

迷わず中に入り、神子の部屋の方に早足で進んでいく。

「おい、天。分かっているとと思うが……」

零が一応と言わんばかりに言ってくる。

「あの青い女は殺すなよ？お前、今そんな顔をしてるぞ？」

「……分かっているさ。少なくとも、このことが終わるまでな」

神子の部屋の前に立ち、扉に手をかける。

「スー……ハア……」

自分を落ち着かせ、扉を開ける。

「ツ……」

部屋を見た瞬間、息を飲み込んだ。

部屋は一週間前と変わらず、神聖な雰囲気があったが、床には布団がしかれ、そこに神子……と布都、屠自古が横になっている。そして――

「あらくやつと来たかしら？」

「……」

昨日見た、青い女がいた。

「そんな怖い顔しないでよ。私は」

「黙れ。神子に何をした」

そう冷たく言い放つ。

「……随分嫌われちゃったわね……でも、あなたには全部話すわ……でも、その前に……」

そういい、女はニコリと笑ってくる。

「私の名前は霍かく 青娥せいが。あなたの名前は？」

「……白憑 天」

「天……ね。いい名前ね」

「世辞はいい。早く言え」

「昨日も言ったけど、不老不死にしたのよ？」

俺はその時、半分以上の意識を、必死に右手に向けた。

そうじゃないと零を抜き、苦しむ間もなく殺すところだったからだ。

「もちろん、理由はあるのよ？彼女、今の政治に不安があったのよ。それで、仏教の他に道教を進めたのよ」

そこで一拍置き、言い続ける。

「道教ではね、超人的な力……不老不死を身につけるために、一度死ななきゃいけないの」

死ぬ、だって？

ここまでは理解出来た。我慢が出来た。

だが、次の一言が。

その一言が、俺の逆鱗に触れた。

「まあ、私に取っては――

自分の力を、他人に見せたかったただけどね」

ガシツツツツ!!!

「っ!?!」

(おい天。止めろ)

俺は青娥の襟を左手で掴み、零を吐息が触れそうな距離で止めた。

「ふざけるなよ……! お前の都合で、人の生き様を変えるんじゃないわねえ……!」

「……確かに、そうかもしれないわね」

「! だったら!」

「でも」

青娥は俺の目を見据えて言う。

「それはあなたにも言えることでしょう?」

「ツ!」

「戦い方を教え、生き方を教え……」

でも、と青娥は続ける。

「結局、無駄になってしまったわよね?」

認めたくなかった。

「俺は……」

何が出来たんだろうか?

否、何も出来なかった。

絶望に打ちひしがれている時、青娥は笑いながら言う。

「フフツ、悲しいわね」

ああ

もう、「黙れよ」

「え・・・？」

鮮血が舞う。

俺の思考が止まった。

(今、なにをした!?)

体が勝手に動いた、と言えぼしっくりくる。

「うっ・・・」

驚いた途端、気持ちが悪くなり、さらに俺の視界は徐々に暗くなっ
ていき――

――

気がつくと朝になっていた、つまり、初めの俺に戻ったって訳だ。
なお、ここからは零から聞いた話だ。

曰く、あの後俺は倒れ、癩だか青娥が布団を用意して寝かせたらし
い。

今は寝起きだが、頭がスッキリしている。

ネガティブでは無いけど、ポジティブともいえない。

・・・何が忘れてるようだが、上手く思い出せない。

・・・?血?何でだ、何で今、頭に過ぎった・・・?

「なあ、天。これからどうすんだ?」

頼もしい零が聞いてくる。

「そうだな・・・旅でもするか」

「分かった。お前も少しは変わらないといけないからな・・・」

「変わるってば、何をだ?」

「これからの特訓内容だよ。肉体的じゃなく、精神的の方を強化しなきゃいけないな・・・座禅でもやらせるか」

「そうか・・・なあ零」

零を・・・月詠を見て、言う。

「俺は・・・あの時、正しいことをしたのか?神子を止めたほうが良かったんじゃないか・・・」

後悔。

だが、零は言う。

「知るか。俺様はお前じゃねえから分からねえ。・・・でも、そうだな・・・」

「?」

「あどばいす?とやらを言うなら、俺様はこう言うぜ。『正しいこと、それすなわち悪しきこと』、だな」

「・・・は?矛盾してるじゃねえか」

正しいことが悪い?何が言いたいんだ・・・?

「意味はテメエで考えな。・・・ほら、そうと決まれば早く出るぞ」

「・・・分かった」

そう言い荷物を持ち、部屋から出る。

不安、後悔、疑問を抱えた俺の心を表すかのように。

空は深い灰色で覆われていた。

(ク、クク・・・あと少しだな・・・でもこれなら・・・)

もっと面白くなりそうだあ・・・！)

妖怪。

初めて会ったのは地下で女の子を助けた時だと思う。

あの時は恐怖は感じないで、ただ自分の出来ることをしようと決意した。

だから、体が動いた気がする。

そして、そのおかげで分かったこともあった。

人は案外、きつかけがなきや出来ないことが分かった。

あの時以降妖怪を見ると、自分なら倒せる、出来るといった自身ではなく、「恐怖心」が先に出てくる。

もつとも、それは零や同輩のおかげでなんとかあったのだが。

あのころの軍は、「妖怪を見つけたら殺せ」だった。

俺は殺すのが嫌で、こちらに敵意や害意を持った妖怪だけを殺していた。もつとも、妖怪はその感情以外は持っていなかったが。

「・・・ハア」

ため息を零す。

ムツシヤムツシヤ・・・。

故に、自分でも意外な行動を取った。

「モグモグ・・・んん、美味しいのぉー！」

目の前で焼いている火の向こう側に座り、俺が川でつかまえた魚をバクバク食べていく、人——だが。

「そうか・・・体調はどうだ・・・？」

その髪は黄色く、そして額には特徴的な少し黒くて長い2本の角が炎の明かりに照らさされて見える。

「おう！お前さんのおかげで、随分よくなった！」

ガッーハッハッハ！

と軽快に笑う妖怪を見て、こちらも微笑する。

さて、こんなことになったのも何かあった訳で・・・。

それが起こったのは、今から2時間前の出来事である。

—————

俺が神子の村から旅立って、かなりの時が流れた。

ほとんど森や山、たまに人が住んでいる所に出て肉と何かを交換していた……。多分、日本1周以上はしているんじゃないか？

まあ、一時洞窟に籠もって精神面での修行をやっていたが。

洞窟内では、主に瞑想や座禅（この2つは靈力を高める方法で一番効率がいらしい）や暗闇に慣れ、観察眼を磨いていた。

今では月が出ていない夜でも、動物の足跡や妖怪の不意打ちに気付くことが出来るレベルになった。

さて、そんな訳でいつも通り森の中を歩いていると、変な足跡を見つけた。

足跡を見る限り、フラフラしていたり、引きずっていたような跡があったから人だと思いき草を掻き分け入ったのだ。

そしたら、そこに誰かが倒れていたのだ。

最初は脈を取り、生きているかを確認したところで、倒れていた奴が目をさしました。

「う……う……」

直ぐに声を掛ける。

「おい、お前大丈夫か？」

ガシツツ！

「っ!？」

急に肩を掴まれ、何かと様子を見ると、そいつはこう言ったのだ。

「は……ら……」

「はらっ？」

「減った……」

ドサツ！

「……………は？」

そこから川にいつて魚を捕まえ、日が暮れたから火を炊き、魚に塩（村の人がくれたもの）をかけて今にいたる。

まあ、その魚はほとんどないのだが。

「さて……………」

ちょうど食べ終えた目の前の妖怪に話しかける。

「そうだな……………とりあえず、自己紹介をしようか。俺の名前は白憑

天。お前の名前は？」

それを聞くと、男はニカツ、と人懐っこい笑みを浮かべ、名前を言う。

「儂は轟鬼とじろぐきつつーもんだ！天、さつきは世話になったな！」

「轟鬼……………鬼か？」

念の為、そう聞いておく。

「お前さんはものを知ってるな！そのとおり、儂は鬼じゃ！」

鬼か……………。

今更だが、この妖怪には知性がある。

多分、いや相当の手練だ。

……………そんな奴が空腹で倒れていたが。

「というか、轟鬼はなんであんな所で倒れていたんだ？」

「儂は旅をしてての。特に意味もなく、フラフラするだけだったのじゃが……………」

こほんと咳をし、続ける轟鬼。

「しかし、最近面白い話を聞いたんじゃ」

「面白い話……………？」

妖怪の中で面白い話なんて、聞いたことが無い。

「おう。そいつの話だところから西に行けばとーっても大きな村がある、とか言っていたんじゃが……………」

……………おい、モジモジすんな。誰得だ。

「儂は派手なものが好きで……………早くその村を見てみたい！と思つて……………」

「腹が減ってるのも気付かなかった、つてわけか」

「うむ、かたじけない……」

ふむ、大きな村か……

あの時代が来るのはもう少し後だから……

(おい、零。起きてるか?)

(起きてるぜ。どうかしたのか)

(あと少しで黄泉、いや、地獄に行く。だから覚悟しとけよ)

地獄がどうなっているかは分からないが、おそらく戦闘は避けられないだろう。前にツクヨミ様が言っていたが、黄泉には「死神」というものがあるらしい。

死神は仙人などの寿命がない人を殺しにくる、地獄の使いだとか何とか。詳しい話は聞いていない。

もつとも不死人の俺の元に現れてないから、実際にいるかは知らないが。

「ところで天よ。天はどうしてこんな所にいるのじゃ? 儂が言うのもあれじゃが……」

「轟鬼と同じで俺も旅をしてるんだ。……そうだ轟鬼、出来れば今までの旅の話をしてくれないか? 寝るにはまだ早いからな」

ふとした興味で、轟鬼にそういう。

妖怪目線での捉え方が気になったのだ。

「うむ、もちろんいいぞ! 天の今までの旅も気になるしのお!」

そこから俺達はいろんな話をした。

中でも気になったのは他の鬼達だ。

轟鬼は昔、「鬼の四天王」と呼ばれる強い鬼の一人だったが、今はそれを抜けて各地を旅しているらしい。

本人曰く、「やはり飯は美味しいのう!」とのこと。

どうゆうことだ? と思いきさらに尋ねると、元はいろんな料理を食べるために旅を始めたらしい。今回の件で自分でも料理を作りたいと思っただけらしい。

あとこの場に酒がないことを悔やんでいた。

酒が好きなのは、どうやら鬼という種族の性らしい。

今の時刻は夜を通り越して真夜中になっている。

空を見上げると満月ではなかったが半月が空に浮かんでいた。
さしてきて。

「なあ、轟鬼ー」

「む？どうしたのじゃ天？」

「……………」

「いや、今は夜遅くだし、そろそろお開きにしようとな」

「もうそんな時間じゃったか……………」

「……………」

「まあ、その前にやることがあるよな？」

「…………何をするのじゃ」

「……………」

「いやお前分かつてるだろ。みなまで言わせるのは、いささか野暮つてもんじゃないか？」

「カツカツカツ、そうじゃのう！儂が半分やる！あと、1番は天に譲るんじゃない！」

「……………」

「いいのか？」

「うむ！助けてくれて恩もおるしの！」

「そうか、分かった。…………さして、と」

「…………ガサツ…………ガサツ…………」

「それじゃあ…………おっぱじめようぜ！！」

「……………」

俺が声を出した時、全方向から異形の形をした妖怪達が襲ってきた。

夜遅く、明かりがない場所で人がいるならそりゃあ襲ってくるだろう。とは思っていたものの、流石にこの数は想定外だった。

今一度気合を入れ、零に手をかけ、居合い切りを放つ前に――

ドゴオオオオオン!!!

「!?」

後ろから大きな音が聞こえた。

振り向くと、そこには地面に拳のみを打ち付けた轟鬼の姿があり――

「楽しい『祭り』の始まりじゃ!!!」

と、その顔に獰猛な笑みを浮かべていた。

#21

強者

『それにしても……なあ、天』

「なんだ……よつと！……零！」

戦闘が始まり、月が少し傾いた時。

天と零は目の前にいる敵から意識を外すこと無く切り伏していたが――

ドコオオオンツツ!!!

やはり、ついつい派手なものを見てしまうのは、人以前に生物の本能だと思ってしまう、1人と刀。

「どうしたあ！こんなものじゃなからうつ！数の利はそちらにあるんじゃないぞお？」

ニカツツ！

と、楽しそうに拳で容赦なく粉碎していく轟鬼をしり目に、天と零は感嘆の声をもらす。

『あんな奴がいたなんてな……くっく、おもしれえなあ……』
「確かにな……」

天は元々妖怪に対する興味があつたが、轟鬼の戦う姿を見て――不謹慎だが――殺し合いがしたいと思つた。

殺し合いと言つてもただの力比べだが。

「ふう……結構数が減つたな……」

刀を収め、天がそう呟く。

まだ妖怪達はあるが、妖力が小さいものはいないし、中くらいのやつは轟鬼が片っ端から片付けている。

一瞬の静寂を過ぎ――

『やつとか』

ズドンツツツ!!!

「おっと・・・」

——大きい

まず、そう感じた。

その次に、体が黒光りしており、その目はギラギラ光っている。特筆すべきは足と手である。

大きな体を支えているのは八本の足であり、どれも先端が鋭く、かなりの硬度を持っているだろう。

さらに手の先は鎌のようになっており、そこら辺の木ならスパスパ切れそうだ。

「蜘蛛の妖怪か・・・それも、かなりの強さ・・・!」

「グガアアアア・・・!」

『気をつけるよ。もしかしたらこの妖怪・・・』

ブオン!

風が唸り、蜘蛛の鎌が振り下ろされる。

それに合わせて刀を振り上げ——

「なっ・・・!」

斬れなかった。

天とて不老不死として何百年生きているが、斬ることが出来なかった経験など覚えてない。

あつたとしても最後に起こったのは何時だ、という問いにパツと答えることが出来ない。

仕方なく刀をズラし、鎌を地面に激突きせる。

そうしたらもう1つの鎌が天の胸に目掛けて振り下ろされるが、それも難なくいなす。

(このままだと埒があかねえな・・・)

内心ではそう毒づくも、その顔には笑みを浮かべる天。
彼自身はそう思っていないが、かなりのバトルジャンキー・・・つまるところ狂戦士だ。

もつとも殺戮が大好きという訳でもなく、ただ単に強い奴と戦いたいだけののだが。

(どうする？どうやってこの妖怪を倒す・・・?)

数秒考えたが、どうも考える方に意識を向きすぎたようだ。

「天！来るぞっ！」

零が叫んだ時、天は我に返ったが既に遅く――

ズドオオオンツツツ!!!

黒光りする巨体に押し潰れた。

「ガハアツ・・・」

これには天も堪らず、口から鮮やかな血を吐き出す。

その音、色を見た蜘蛛の顔が喜びに染まり、そして大きく目を見開いた。

「はっ、詰めが甘いぜ・・・」

反対に獯猛な笑みを浮かべる天。

「どんなものにも、必ず弱点はある。人だったら体は大きくなかったり、鳥だったら翼が無ければ空も飛べなくて生きること難しい」

「グツ・・・ガアアアアア!?!?」

突如訪れた痛みに、蜘蛛妖怪は叫び、悶え苦しむ。

「蜘蛛だった場合は――1番柔らかい腹とか、なっ！」

と、威勢よく血と共に声を出し、押し込む。

天はただ攻撃を食らった訳じゃ無い。

自分に当たる瞬間、刀を蜘蛛の腹目掛けて思い切り突き刺したのだ。

「グウウウツツ！」

痛みを感じ怯んだところで、霊力を込めた両足で、柔らかい腹を思いつき蹴る。

蹴られたことにより、蜘蛛妖怪の体がほんの少し浮き、天が刀を引き抜いて力強く両手で持ち――

「――天零流刀法・三十七式」

反射した月光が、辺りに煌めく。

「双絶撃ッ！」

柔らかいものを斬った時の音と、硬いものを斬った時の音がほぼ同時に響いた。

双絶撃。

もし、1度の太刀で斬れなかった場合、どうすればいい？

その問に対しての答えは簡単だ。

斬れなかった所を、もう1回斬ればいい。

一太刀、次のための布石。故に命までは刈り取ることが出来ず。

二太刀、命を、全てを断つ。

「お前がどれだけ硬くても、必ず斬られれば死ぬ。なら俺は、お前が死ぬまで斬ってやる」

蜘蛛妖怪は真つ二つになって、そのまま地面に崩れ落ちた。

天は敵の最後を見て、ふと轟鬼の様子を見ようとし――

ゾワッ

嫌な予感がし、後ろを振り向く。

するとそこには、大きな蜘蛛・・・ではなく、大量の小さな蜘蛛が重なり、絡み合い、さっきの大きな蜘蛛の形になっていた。

「なっ・・・」

さっきの蜘蛛が実は小さい蜘蛛だったのか――、と考えるも、すぐにその考えを否定する。

さっき斬った時に感触はあった。よく目を凝らして見ると、小さい蜘蛛1匹1匹の背中に傷がある・・・何故か両断された筈なのに生きてはいるが。

そして天が観察していると、小さい蜘蛛全てがニヤアアツツと笑い
空中にバラバラになって飛んだ。

逃亡など、天が容赦することなく全て斬ろうとしたが、あることに
気になったので止める。

『おい追わねえのかよ。逃げられちまうぜ?』

「追いかけていが・・・さつきからうずうずしてる奴がいるからな。そ
いつに任せる」

ピタツツツツ!!!

「「「「「?!?!?!?
「「「「「」」」」」」

「カツカツカッ!すまんのお、天!ちよつとの・・・」

「別にいいぜ。さつきから端でずつとうずうずしてたからな。・・・

じゃあ、任せた」

「おう!・恩に着る!」

そういうが早く、轟鬼は手を大きく広げ、無造作に握りこんだ。

たったそれだけの作業で小さな蜘蛛たちはミシミシと音をたて―

バアツツン!!!

弾け飛んだ。

これを見て天は確信する。

「轟鬼、お前能力を持つ妖怪だったのか・・・強すぎじゃないか・・・
?」

「いや、そんな大したもんじゃないぞ。俺の能力は」

「ストップ」

「素晴らしい、天は轟鬼が喋るのを止ませる。

「能力は言うなよ？もしお前と殺るとき、分かってたらつまらないだろう？」

「そう言うくと轟鬼は目を丸くして、心地の良い、まるで子供の様な無邪気な笑みをその顔に浮かべる。

「カカツ、面白いことを言うのう！・・・それよりも天、もう敵は来ないかの？」

「いや、あと一体いるな。そしてコイツが一番強い妖力を持っているな」

「ほう・・・それは楽しめそうじゃの！」

「・・・ああ。そうだな」

「あえて口に出さないが、その妖力、さっきの戦闘中にあつたりなかったりしたのだ。

「完全に妖力を消すことなんて、不可能だ。

「もしかしたらもう逃げた、と天も考えたが、それも杞憂に終わりそうだ。

「来たぞ」

「2人は目を細め、向かって来る妖怪を見る。

「薄い紫のワンピースに、これまた薄い紫の瞳。

「頭には帽子を被っているが、(多分)彼女の派手な金髪の上に乗っているという感じである。

「更にその片手に日傘を持っており、優雅に頭の上に開いている。

「おお・・・」

「轟鬼が声をもらす。それも仕方ないことだろう。

「目の前の女性はあまりに美しすぎた。

「一歩踏み出し、天が問う。

「おいあんた、この妖怪達のまとめ役・・・じゃなさそうだな・・・騙したな？」

「！・・・何故、そう思ったのですか？」

「いやあんた胡散臭いじゃん」

「づっっ」

そう。

先程美しいと言ったが、彼女の顔にニヤニヤとした笑みが張り付いているため、どこか胡散臭さを感じる。

「・・・初対面の人になんてことを・・・」

「いやあんた妖怪だろ」

「うう・・・」

ちよつと目の前の女性を弄るが、本題にはちやんと入る天。

「そんで、なんでこんな真似したんだ？」

すると目の前の女性は目を閉じ、深く深呼吸してこう言った。

「お願いします・・・どうか、力を貸しては頂けませんか・・・」

この時天は、嫌な感じを覚えた。

そして同時に、歯車がカチリとハマるような、パズルのピースがピタッとハマったような。

そんな、なんとも言えないような感じに陥っていた。

今、2つ目の物語が幕を上げる。

「力を貸してくれ、か・・・」

目の前の妖怪から敵意を感じないので、刀を鞘に仕舞う。

「その前に、なんでこんなことをしたか教えてくれないか？」

そう言うのと、妖怪は少し俯きながら答えた。

「・・・私には・・・やりたいことがあるの・・・」

「ふむ？やりたいこととな・・・？」

轟鬼が首を傾げながら口に出す。

「貴方達に聞きたいのだけど——」

「——人と妖怪の共存は、出来ると思うかしら・・・？」

「人と妖怪の・・・共存？」

天と轟鬼が同時に喋る。

「それは文字通りの意味かろう？」

轟鬼が一応と言わんばかりに確認する。

「・・・ええ。文字通りの意味よ。妖怪達にも、人間と仲良くしたい者が沢山いるの」

そこまで言っただけ息を吸い、さらに言葉を紡ぐ。

「私は、人と妖怪達の架け橋になりたいの。今すぐに、簡単に出来ないことは分かってる」

「だから、貴方達に力を貸してほしいの」

「私一人だと、何十年、いや何百年かかるか分からない・・・でも、もし協力してくれる人が、妖怪がいたら・・・共存はすぐ出来るのよ」
彼女の目を見る。

恐らく、嘘はついてないであろうと天は感じた。

「お願い・・・私に力を貸してくれるかしら・・・」

そこで彼女は頭を下げた。

相手がまだ敵対しているかもしれないのに、みずら隙をだしたのだ。

天はそこで目を閉じ、天の、彼なりの答えを告げる。

「無理だろ」

明らかな否定。

「・・・どうしてそう思うの?」

彼女の声は震えていた。

悔しいような、悲しいような声で、問いかけた。

「妖怪は人を襲う。そして、人はその妖怪を・・・妖怪達を憎む。そんな今までの関係が、覆ると思うのか?」

例えだが親を妖怪に殺された子供が、その妖怪と手を取り、笑い合えるだろうか?

「・・・っ」

誰に聞いても、答えは否だろう。

「現にさっきあなたは妖怪達を操って俺たちに攻撃を・・・敵対したよな?それでホントに共存ができるのか?」

「・・・」

彼女は完全に沈黙する。

「・・・なんてな」

天が軽く呟く。

「やったことの無い事を無理って最初から決めつけるから出来ないんだよな」

「人と妖怪の共存。一筋縄ではいかないことだ。」

「でももし・・・そんなことができるなら・・・」

——どれほど良いか。

「えっ・・・それじゃあ・・・!」

彼女が顔を上げ、その顔に笑みを浮かべる。

「いいぜ。その話、乗った」

天が声を高らかに上げ叫ぶ。

「この白憑　天、あんたに力を貸す。その代わりに、あんたのその願いを、望みを絶対に叶えろよ」

「カッカッカッ!ふむ!やはりお主は面白い男じやの、天!」

そこで今まで喋らなかつた轟鬼が笑いながら言う。

「よし!儂も力を貸すかのう!カカッカッ!」

「良かったな。大きな目標への第一歩だぞ」

「・・・ありがとう。こんな夢物語に付き合ってくれるなんて・・・」

「夢物語じゃないだろ。叶うんだからな」

「!・・・ええ、そうね!」

—————

妖怪との共存は簡単じゃない。

だけど、出来ないわけじゃないと俺は思う。

今日(昨日)俺と轟鬼が、例えば短い時間でも仲良く出来たんだ。

全員が全員、素直になるとは思えない。

だが、それでも時間をかけてゆっくりと良くしていけばいいと思う。

「よし・そうと決まれば飲み直すぞ！天！」

轟鬼がそう提案する。

「そうするか。今から飲み直すのも、まあ悪くないな」

そこで後ろに振り向き――

「・・・そういえば、あんた名前はあるのか？あるなら教えてくれ」

「私の名前は八雲やくも 紫むらさき。スキマ妖怪よ」

「スキマ妖怪・・・？初めて知ったな・・・。ま、とりあえず酒でも飲みながら話そうぜ、紫」

「ええ。貴方達の話も聞かせてね？」

「あいよー」

そんなこんなで。

不死人と鬼とスキマ妖怪という面子で酒を飲み直す。

まだまだ夜は長い。

「……なあ天。いつまでこうしてるつもりだ……」

鬱蒼と生い茂る木々の中、綺麗な声で鳴いている鳥以外の気配を感じず、何も起こらない決めつけた零が、気だるげな声で話かける。

「……？何をだ？」

「だから……いつまでこんな所を歩くつもりなんだよ……。走れ、めんどくせえ」

天、轟鬼、紫で行った飲み会。

協力することにした天は、先ず紫の言われた通りの場所、もとい自分が目指していた街、いや、都に歩を進めていたのである。

『都には行くのはそもそもその予定だったが……。どうして、都周辺なんだ？』

紫にその事を天が問うと、顔に特有の胡散臭い笑みを浮かべながらも答えた。

『最近、都に結構強い妖が現れたって言う噂を聞いたの。ふふつまあ私が行つてもいいのだけでもねえ？』

『ぬぬ？そんな噂どこで聞いたんじやお主？』

轟鬼がそう言うのと、紫は少し哀愁を込めた顔で口を開く。

『友達が、ね』

あまり触れられたく無い内容なのだろう。いやそんなことよりも。

『お前……友達いたんだな。てつきり居ないとばかり思ってたぞ』
言った瞬間、天の目の前の空間が縦に割け——
比喻ではなく、文字通りの意味である——左右に広がる。

中は生気が感じられる大量の目が、俺を見ていた。

やがて、その中から紫の白い、貴婦人が付けているような白い手袋

が、力強く握られ、拳の形を形成し出てくる。

慌てる気持ちを抑え、冷静に見極め上体を後ろに倒すことでこともなげに避ける。

紫の拳は空を切り、悔しそうに手を振り回しじたばたする。

やがて、その空間は元のように端と端がくつつき、何も無かったかのようになる。

『なるほどね・・・ふむふむ。今のがスキマって訳か。そして、それを自由に操ることが出来るから』

『スキマ妖怪、とな。かかつ、強いおう』

能力としては、かなり強い部類だろう。

弱かった訳では無い。単純に、天との経験の差が、実戦の差があり過ぎるだけなのだ。

『~~~~ツツツ!!』

完全な不意打ちを潰された紫が、言いが耐えのない恥辱に身を震わせる。

この後謝り、

ちよつとしたトラブルを思い出し、クスツと笑う天と、その反面、そんな大事な時に寝てた零は今も尚眠そうに——いや、飽きているだけか、と天は決めつけた。

「その気持ちも分かるけど、少しはゆつくり行かせてくれ」

「・・・ちつ、まあいい」

寝る、と一言だけ残して零の気配が少し収まる。

そんな様子に天は呆れつつもその心意気にほんのちよつと同意し、肩を少しすくませる程度に済ませた。

実のところ、轟鬼と紫の2人と別れた時が少し肌寒い日の出だったが、既にその太陽は散々と照りつけている。

もつとも、この木々の中ではほんの少しだけしか日が入らないが。

(それにしても・・・いつまで続くんだ・・・?)

流星に飽きてきた天は、いつその事零が言っていたように走るか・・・と考えてきた時。

ふと視線を感じ、少し鋭くなった目線をずらすと・・・。

「・・・キューン」

見たことが無い、クルつとした目、中々目立つ橙色、しんなりとした尻尾をもった狐がいた。

・・・体がほっそりと、さらに小さいことから子狐であると思う。森の中に1匹ぼつんと、こちらを見ている。

しかし・・・何ともまあ・・・。

「可愛「うまそうだな」っておい、何言ってるんだ」

いつの間にか起きていた零が、中々嫌なことを言う。

天は食う食われる以前の問題に、動物が好きだ。

・・・もちろん美味しい動物も好きだが。

「にしても・・・なんでこんな所に狐が？痕跡とかは見なかったし・・・何より気配を感じなかったぞ・・・」

狐をジューつと見ながらも考える天。

一方狐は微動だにせず、時折その愛くるしい目をぱちくりさせている。

試しに一步踏み出すも、怯えはしているが逃げない。

変に思った天は、狐のすぐ側に向かう。

「・・・なるほど、そういうことか・・・」

狐は罨にかかっていた。

恐らく、人間が仕掛けたであろう罨は、狐の細い足に深く食い込み、辺りに乾いた血があることから、結構前に逃げようとし、諦めたのか、と天は分析する。

「・・・・・・キューウ・・・」

可哀想だ、と感じた天は零を抜き、その刀身を素早く振り抜き、狐を拘束していた罨を斬る。

「キューウ！」

狐は鳴き声を上げつつその場から離れ、天の元へ近づいてくる。

しかし、傷が深かったのかフラフラしており、とても安全感が無い。

だが、一緒懸命近づいてきて、足に頭を擦り寄せてくる狐を、天は刀をしまい、両手に掲げる。

「もう罨にかかるなよ？次は助けてやれねえからな」

素晴らしい狐を地面におろし、首辺りを撫でる。
心地よさそうにする狐。

さて、そろそろ行こうかと天が思ったとき。

「クックツ・・・おい、天。あの狐を見ろ」

「？」

零の言葉に従い狐を見るも、特に変わったことも無く、こちらを見ている。

「・・・特に何ともないが・・・。どうかしたか？零」

「ハァー・・・。物分りが悪いな。あの狐、お前について来いって言っ
てんだよ。ほら、早く行きやがれ」

驚くもつかの間、狐はキュウとひと鳴きして、草の中を進んでいく。

「ほら、早く行け」

初めての事に戸惑いながらも、天は狐の後を追う。

自分で言っというてあれだが、狐は怪我をしていたはずだ。それは
さつき確認したし、俺によってくるとき、フラフラしていた。

なのに今はどうだ？

地面を縫うように走り、拳句の果て後ろにいる俺を見る余裕すらあ
る。

少し危惧し考え、どうするのかを決めようとしたその時、キツネが
急に止まる。

遅れて止まると、狐はどこからか葉っぱを取り出し、口に咥え、そ
のまま空中に放り投げた。

そして自分も飛び跳ねて一回転し、頭に葉っぱを乗せて着地する――

ポんツ!!!

すると、なんとということだろう。

今まで何ともなかった、ただの森だった場所が無くなり、狐の石像

がのつた岩柱が並び、更にその奥に木で作られた建築物があるではないか。

そして唐突に増える目の前にいる狐——だったものと同じ気配がする。

「……………」

空いた口が塞がらない、というのはこんな時に言うのだろうか。

目の前にいたはずの狐の子は、今やあどけない少女の姿になっている。

狐の子、と断言出来るのは、キツネ色の耳としっぽがあつたからだ。少女は凜とした、しかしまだ少女を感じさせるあどけない声で俺に向かつてこう言い放つ。

「ようこそ、キツネの里へ！私の命の恩人さん！」

これが、キツネとの初めての出会いだった。

「キツネの・・・里？」

そう呟き、目の前の人型の狐に問う。

「そう、ここは狐の里！ 私たちの住処で・・・」

そこで言葉を切り、首を傾げた状態で止まる。

「うん、住処だよ！」

さてはこの子アホの子か？

「なあ、なんで俺をここに連れて来たんだ？」

見たところ耳や尻尾、狐の部分を残しながらも人の形をしている目の前の妖怪？と言えいいのか。

普通、こういうのは自分たちの故郷に入れられないものじゃ無いか？

「えーっと、それは」

と、言う前に遠くから歩いてくる音がする。

「あ！へきねえー！どこいったのー！」

見るとこちらにもまた少し垂れてる耳、くるっとした目で目の前のへきと呼ばれた少女を見る男の子がいた。

「かえりがおそいって、おさがしんぱいしてたよー？」

「うん、分かった。後で会いに行くよ」

「そこのおとこのひとは？」

「えーっと、私の命の恩人さん！」

そーいうや否や、目と口を大きく開く男の子。

「え!? だいじょうぶ!？」

「うん、平気だよ」

「おさにつたえてくるー！」と言いながら走り去って行く背中を眺めつつ、今の状況を整理する。

狐を助けた↓連れてこられた（今ここ）

うん、分かりやすいな。分かりやすすぎて分かんないな。

「それで、なんで俺をここに連れてきたんだ？」

「助けて貰った人間を里に連れてくる。私たちの狐の長が決めたことなんだよ！」

「へえ……」

「いったい何時からこの地にこの文化が根ずいたのだろうか？」

「少なくとも、ここ数百年で思い当たる記憶は無い。」

「私も長に会いに行かないと行けないし、もう少しだけ私に着いてきて！」

――――

彼女の名前は碧^{へき}と言うらしい。

なんでも、この里の長に付けて頂いた名だと言う。

確かに、彼女の目はとても澄んだ緑色だ。

「なあ碧、さつきから気になっていたんだがこの長はどんな人なんだ？」

前にてくてくと進んでる史希は後ろに振り向き、器用にも後ろ歩きをしながら天の質問へ答える。

「長はねー、とっても優しいの！私達と遊んでくれるし、面白い話もしてくれるの！」

碧は随分嬉しそうにハニカミながら笑う。

なるほど。それほど人望、もとい狐望が厚い狐なのか。

「あ、着いたよー！ここが長の御屋敷だよ！」

人になれるとしても狐、だが建築技術は充分高いようだ。

神子の屋敷程ではないが、外からでも長い年月が立っているのが分かる。だが、隅々まで手入れをされているようで充分大きい。

まだ外にいる故に全貌は計り知れないが、余程凄い狐なのだろうか。

などと天が考えていると、碧は両手を口にあて、息を吸い込むと大声で長を呼ぶ。

「長ー！碧、ただいま戻りましたー！」

すると、屋敷からドタバタという音が聞こえ、こちらへとどんどん近づいてくる。

数秒後、玄関の扉からドンツ！と盛大な音を立て、1人の男が出てきた。

「あ、長！ただいまー！」

「ハア、ハア……。ただいま、じゃないだろうか？一体どこに行つてたんだい？」

顔に優しい笑みを浮かべ、男は優しく怒る。

やがて天を見ると目を丸くし、すぐさま先程より細める。なるほど、狐だな。

「……ふむ、珍しいお方だね。あの子から聞いてるよ。碧を助けてくれたんだらう？」

不思議な男だ。優しい目だが、こちらの奥底まで見られているような視線を感じる。

「長ーその目は嫌われるつて前も言ったでしょ！」

「あ、すまない。里に人が来るのは久しぶりでね。近頃は物騒な妖や人が増えたと聞いてね……」

そういうと、すぐさま人懐っこい笑みを浮かべる。

「それじゃあ、屋敷にどうぞ。見るところ、旅の方だろうか？今日くらいゆっくりしていつてくれないかな？」

「……そうだな。それに気になることがあるしな」

天は薄く笑う。

目の前の男は、どうやら中々キレ者らしい。

ああ、と呟く男は未だに口を緩ませ言葉を放つ。

「名を言うのがまだだったね。僕の名は白銀空岸。しろがねうかん皆からは長と呼ばれているんだ。好きな方で呼んでね」

「俺の名前は白憑 天。短い間だが、世話になる」

「そういい、手を出す。」

天は握手を求めただけだが、空岸は首を傾げる。

「どうやら握手を知らないらしい。」

俺は出した右手で空岸の右手を掴み、手と手を繋ぐ。

「握手って言うんだ。挨拶みたいなもんだ」

「あくしゅ……。ふふ、やはり僕が知らないことはまだまだ多いらしいね」

「はは」

——嘘はつくなよ。

2人は笑う。

片方は知的さを思わせる目付き。

片方は面白さに笑いを堪える目付き。

「これからよろしくな、空岸？」

「ええ、こちらこそ。短い間ですがね、天」

似たもの同士は笑う。

まだ日は真上を過ぎていない。

「それじゃあ、今日は僕の屋敷に泊まりなよ。碧、叔母様方に伝えて来てくれるかな？明日会いに行くからね」

「わかりましたー！」

そっさいい、碧は去っていく。

「それじゃあ、歓迎するよ」

ようこそ、狐の里へ。